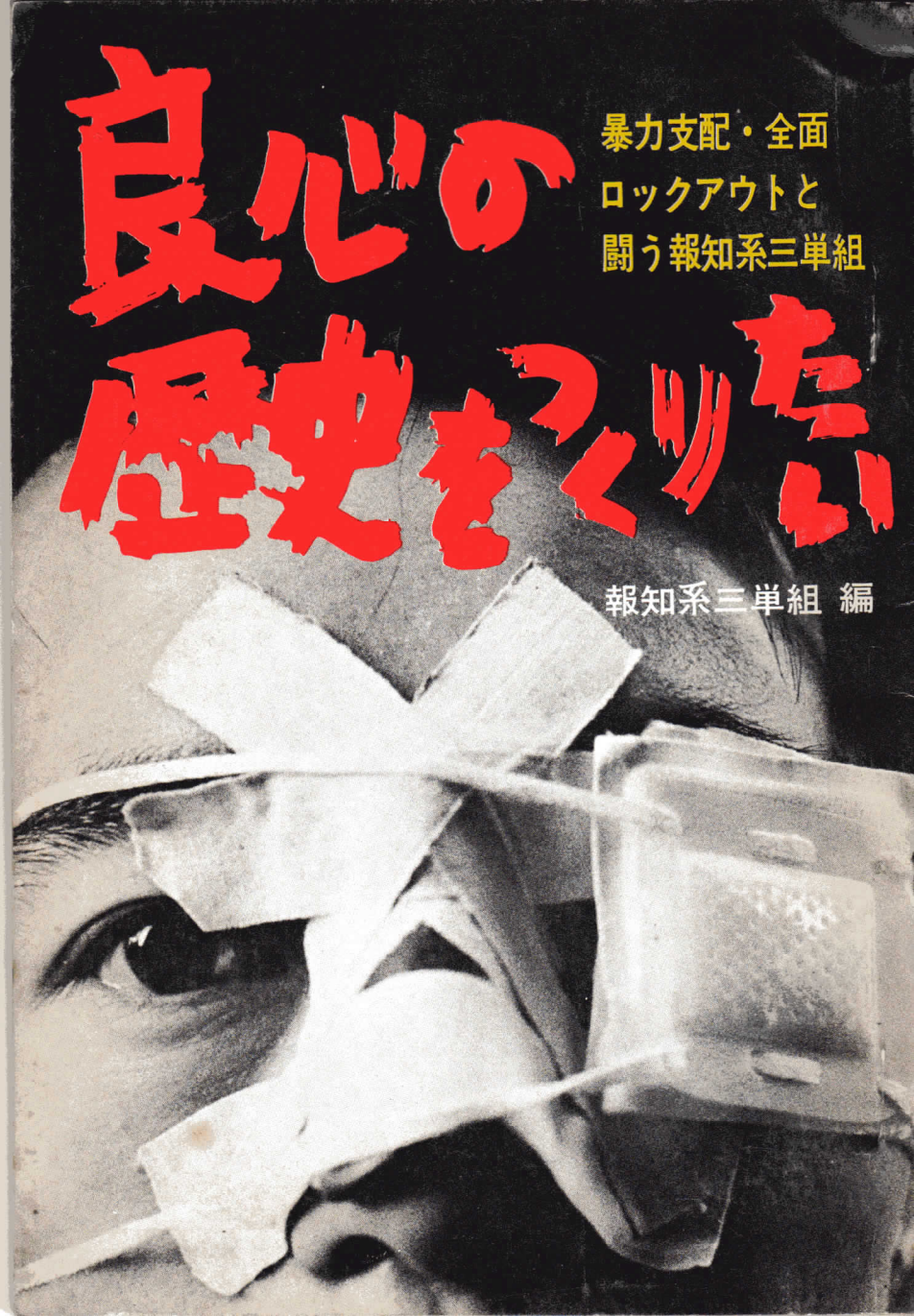
良心の歴史をつくりたい

暴力支配・全面ロックアウトと闘う報知系三単組

報知系三単組 編



良心の歴史をつくりたい

I 暴力団に守られた新聞とは？

1 「報知新聞に右翼暴力団」……そりゃひどい ……一

2 「読売の植民地」としての報知 ……四

3 いまや人間性を守るたたかいへ ……七

II 記者たちは〝不正の現実〟を許さない

1 〝正しい記事〟のため今は書かない ……一六

2 心を売った仲間たちへ ……二九

III みんなで、みんなの職場を作ってきた

1 争議団事務所は〝生きのいい編集局〟 ……三

2 紙どめストライキから三単組共闘へ ……三八

IV 岡本アイヒマンのいったこと・やったこと

——岡本体制の正体

1 労働者・労働組合の見方 ……四四

2 実践——分裂・二組づくり ……五〇

V 広がるたたかい

——全国各地から「これはオレたちのたたかい」

1 新聞・マスコミの仲間たちの熱いスクラム ……六〇

2 次々にとどく〝心の弾丸〟 ……六四

3 歴史が教えた〝七〇年代の展望〟 ……六九

I　暴力団に守られた新聞とは？

1　「報知新聞に右翼暴力団」……そりゃひどい

青島だあ、大変だあ！

「なに？　新聞社に右翼暴力団……。そりゃひどい。大変だあ！」

〝青島だあ！〟で親しまれているタレント。参議院議員でもある青島幸男さんは、スポーツ紙・報知新聞社内で起きている暴挙を耳にして激怒した。

「いま、プロ野球の八百長問題が社会問題になり、連日、報知新聞でも告発記事を紙面に出しているじゃないか。その新聞社の経営者が暴力団とのつながりがあるとすれば、プロ野球の〝黒い霧〟をきゅうだんする資格すらない。公正で民主的な報道をたてまえとしている新聞社が労使の紛争に暴力団の力にたよるとは言語道断。良識ある新聞記者なら怒るのはあたりまえだ。一タレントとしても国会議員としても放置しておける問題ではない。できる限り力をかすよ」

「報知新聞社に暴力団がいる？」とだれもがいぶかるようなことが起こったのは四月一五日だった。

その日、戦闘服とアミ上げ靴の男たちは、ア

ッという間に社内を占領してしまった。会社のいい分は、社内秩序維持と新聞発行確保のガードマンだという説明。彼らは職場を巡回して威圧、仕事を監視し、組合掲示板のビラをはがす、私物ロッカーをあけて、組合ニュース、週刊誌などを「燃やしてやる」と引っぱり出して、はては本多執行委員に飛びかかりはがいじめにしたり、新聞労連の坂東副委員長や太田清治千代田区労協議長を腕ずくで社外に押しだしたりした。ツバをはきかけられた人も何人かいた。抗議すると、その人のところへきて、「ぶっ殺してやる」とおどすといったありさま。報知新聞の中は、まるで〝暴力団のたまり場〟のようになった。

あばかれた暴力団の正体——国会で追及

たまりかねて、組合がしらべてみると驚くべき事実が明らかになった。「特別防衛保障株式会社」と名のる、この〝ガードマン会社〟は、まず何を警備するのかも不明確な集団であること、そして飯島社長は戦前からの右翼ボス三上卓につながり、配下に自称数千の暴力集団をかかえ、「主婦と生活社」争議、委員長が殺された三光タクシー争議、大学紛争など数々の争議に暴力で介入することを業としてきた集団であることなどがつぎつぎに判明した。

岡本社長登場以来、数々の暴虐無法な労働者敵視政策になれてきた報知労働者も、この重大な事態にはとまどった。怒り心頭に発して、若い組合員がガマンしきれず、スクラムでもぶっつけたら、それこそ彼らの思うツボである。まず、世間の人に知ってもらうこと——二回で八〇万枚の大量ビラで東京・大阪の市民に訴えるとともに、各界の人びとに真相を訴えて歩いた。

すでに会社のとった数々の労働者いじめのや

り口は労働委員会や裁判所で不当干渉だと判定されたり、勧告されていたが、会社はそれを無視したばかりでなく、こともあろうに右翼暴力団を会社の内外にのさばらして、労働者オドシをはじめたとは――これはもう「言論の自由」抑圧と同じく、「労働者が人間らしく働いて生きる権利・仲間と団結する権利」など、働く者が労働者として、また人間として当然にもっている権利をふみにじり、現憲法の基本精神をも根本からくつがえす、無法・労働者殺しのファッショ体制と呼ぶほかはない。

しかも、天下の大新聞、「読売」の系列下に起こった事件であり、一般新聞は同業の仁義を尊重してか、この新聞界の「言論と生き方」の根幹にふれる問題については詳細に書きたがらない。こうなれば、市民に訴え、労働者のスクラムで、この白昼、大東京のまん中にまかり通っている無法会社を働く仲間たちの力をかりて包囲する以外にない。

国会では、社会党の島本虎三議員が四月二八日の衆議院社会労働委員会で、緊急質問に立ち〝警備会社〟なるものが、スト破りの専門会社であることを追及した。

島本委員　「争議中に、暴力団をスト対策に入れて岡本社長が直接指揮して、ビラはぎ、個人ロッカーの私物持ち去りなどの不当労働行為をやっている。またこれは、職安法四十四条違反ではないか」

住労働省職安局長　「特別防衛保障会社（飯島勇社長、東京都中央区築地一―一八）の件については調査している。警備内容が不明確で、契約書もないようだ。四十四条違反の疑いありの感じを持った」

島本委員　「新聞製作の仕事には関係ない。この写真を見れば一目瞭然、戦闘行為ではないか。（戦闘服、階級章をつけた暴力団の写真を野原労

相に示す)。調査ではなまぬるい。こんな不当労働行為、職安法・労働基準法違反をそのままにして、労働省の存在意義はない。大臣の決意を聞きたい」

野原労働大臣　「おどろいた。ここまでエキサイトすることは遺憾である。十分検討して対策を講ずる。争議についても解決に努力する」

島本委員　「特別防衛保障の飯島勇社長は、戦前の五・一五事件に関係した三上卓グループ系で拓禅会のメンバーで逮捕歴四回、四十三年十一月の日大紛争で凶器準備集合罪で逮捕され、現在保釈中だ。昨年、二月二十四日号の『週刊サンケイ』によれば、これまでスト破り将軍といわれた覆面をかなぐり捨て『スト破り専門の警備会社を作る』と宣言した。その後この『特別防衛保障会社』を昨年四月十五日に設立している。これまで、主婦と生活社の争議、相模鉄道交通、東京発動機、そして委員長が殺された三光タクシーの争議にも介入している。この事実を知っているのか」

住局長　「島本氏の発言どおりである」

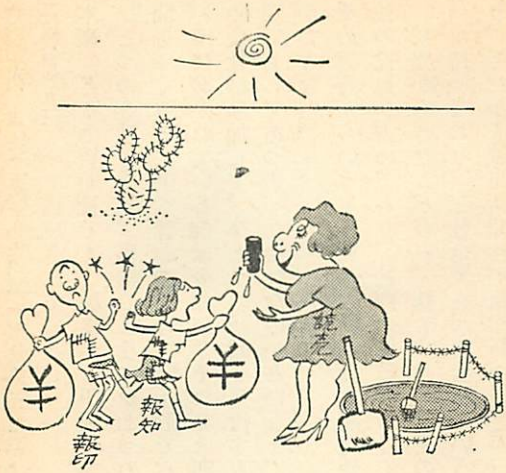
島本委員　「都の職員が飯島社長のもとへ調査にいったが、身の危険を感じて帰って来たと聞いている。警察、大蔵、運輸など関係省庁と協力して、対策を有機的にやり行政措置を緊急に行なえ」

野原労働大臣　「調査のうえ対処する」

2　「読売の植民地」としての報知

発行部数八〇万、スポーツ紙の王者のボロイもうけ

社内の問題が、国会にまでとりあげられる報知新聞とは、どんな会社なのだろうか。〝巨人びいき〟で知られる報知新聞は、野球の記録やあとがき、企画物を中心的な売りものに、一般スポーツ、最近、非常に人気のあるギャンブル、映画やテレビ、舞台などさまざまを紹介し



売りまくっている日刊紙だ。現在、平均して東京六〇万部、大阪二〇万部を発行して一日に販売高約一六〇〇万円と広告収入約七〇〇万円を売りあげている。しかも、驚くなかれ、この中味は、固定読者が六割。駅売りも報知にかぎっては〝すぐ売り切れる〟という安定した現金収入源をもっている。

さらに一般紙のように各地に支局があるわけでなく、国外関係の費用もかかるわけがないから、アルバイトをふくめて一三〇〇人の新聞社としてはボロイ商売といえる。一般紙の日本経済新聞が七五万部で一九九〇人、西日本新聞が六四万部で一三〇〇人（新聞協会調べ、臨時をのぞく）という数字の対比をみても、会社がいうように、とても〝世間並みの賃上げのできない〟会社ではない。

ところで、一般に報知新聞といわれているが現実には報知新聞社（東京七五〇人・内組合員二九

〇人、大阪三〇〇人・内組合員一五〇人)、報知印刷所(東京三〇〇人・内第一組合員一三〇人、第二組合員一〇〇人、大阪一五〇人・内第一組合員五二人、第二組合員五三人)で構成されている。

本来、どこの新聞社でも、編集から印刷まではひとつの会社であり、報知のようにひとつの新聞をつくるのに働く者が別会社という形でバラバラにおかれている例は少ない。それでは別別の会社が参加して、ひとつの新聞を発行する協定でもしてあつまった会社なのかというと、そうでもない。

その実態からいうと役員会の過半数は読売新聞社の役員が占めており、社内の役職者の多くは、読売からきた人が多い。株もすべて読売の役員が持っており、三社は読売が親会社というより、あたかも読売新聞社が報知新聞を発行し、業務を三つの会社に分けて経営しているといった方がよさそうだというのが、その実態だ。これはいったいどういうことになるだろうか。

たとえば経営上でいうと、報知新聞社は、読売新聞の販売店を使い、写真電送を読売にたのみ、新聞輸送業務も読売によっている面が多いし、大阪発行の新聞は読売新聞社が印刷している。したがって、ここにはたいへんなカラクリを働かすことができることになるわけだ。つまり、株の配当の操作、販売店、電送などの使用料、印刷代の読売への支払いなどによっていくらでも、報知であがった収益を読売新聞社に吸収することができるということだ。よみうりランド建設に報知の金がたくさん流れたというウワサも、このへんから出ているようだ。

また報知新聞社は報知印刷所に施設を貸している(以前、会社は団交で「報知印刷所は人間以外はすべて報知のものだ」と発言している)から、賃貸料をとっていることになる。経営者は同じ読売で

も別会社であるから、賃刷り料・賃貸料の操作によって報知の決算はどうにでもなる。

以上のことから報知印刷所から報知新聞社へ報知新聞社から読売新聞社へいくらでも、合法的にお金は流れていく。このようなことから報知を〝読売の植民地〟と呼ぶ人が多いわけだ。

報知新聞はスポーツ紙としては、日刊スポーツ（三七万部）などとくらべて発行部数ではるかに上まわっている。だから広告もとりやすい。とくに野球シーズンは広告をことわるケースも多いほどだ。ことしのオフ・シーズンでさえ、長谷川編集局長は整理部会で「おかげさまで、オフシーズンであるにもかかわらず五万部増えた」と発言している。「報知が赤字だ」といったら、少しは新聞界を知っている人なら、ひどい冗談だと感じるだろう。ましてや暴力団の介入することなど論外の状況といえる。しかし、夏も近いいま、報知新聞では賃上げには一円の回答もせず、社内は一日一万円で雇われた暴力団がのしあるいている。

3　いまや人間性を守るたたかいへ

ウソッぱちの「赤字」と「アカ」攻撃

報知新聞と報知印刷の労働者はこうしたカラクリで、大きなもうけをすべて、読売資本にすいとられてしまう、〝植民地〟新聞の社員として、いつも頭をたたかれ忍従しつつ、今日のスポーツ紙の王者「報知」をつくりあげてきたのだ。

岡本鬼社長が口を開けばいう「赤字」と「アカの組合」だから、労働者をやっつけてもいいという論法――果たして実情はどうか？

報知の「赤字」については、もはや多言を要しない。いまのべたように、きわめて単純な他

紙との比較や、一日の売上げ日銭、広告収入からみても報知が赤字かどうかはすぐわかる。立派な社屋や土地ももっていて、他社とくらべものにならない安定性である。

これでもしかりに赤字だというなら、だれが考えても作られた赤字で、まさにあげられている収益が大量にどこかへいっているとしか考えようがない。

報知の労働者は、もし会社が赤字だといいはるなら、その証拠を出すことを要求する。自分たちが作ったものがどのように使われ、どう収益を生んでいるのかを一言もしらされないで、ただ赤字だとだけいわれても納得は絶対にできない。このカラクリをわれわれは知る権利があるし、当然、しらせることを要求する。

では岡本社長のいう「アカの組合」とはいったいどうなのか？

もともと報知のたたかいは、のちにのべるように読売資本系列下の労働者として加えられていた、あらゆる低賃金、長時間の重労働、無権利の状態から、長い時間をかけて、人間らしく働ける職場づくりととりくんできたにすぎない。決して特別なことをしたわけではない。

まっとうに働く者が、したくないことをイヤだといえるような職場、差別やブジョクがなくなる職場をつくりたい——これが報知系三単組のたたかいの中味なのだ。ジョーダンじゃない。これがアカだというのか。報知のすべての労働者は、自分たちがおかれている現実や、やってきた事実からいって〝アカ攻撃〟を決して許さない。

報知労働者は、いまやっと自分のコトバで語りはじめたのだ。しかも、新聞と印刷の労働者ではずい分、気質も違った。その仲間たちがやっと、賃上げや労働条件の改善を一緒に、報知経営者に要求しはじめたところなのだ。賃金は

安いし、まだ各部毎、各人毎バラバラの賃金体系さえ直らず、組合活動に熱心な若者が多いといわれる輪転職場さえ、今どきこんな新聞製作の現場がないといわれるほど、休憩室さえロクなものもないのである。

つまり、こまかい経過はぬきにしても、報知の組合の今までのたたかいをひとことでいえば、「人権闘争」の性格が根っ子にあったのだ。これをとおりいっぺんのアカ攻撃でオドカシ、ゴマカソウとする手口を、すべての報知労働者はもはや見抜いている。

この点で岡本社長が『サンデー毎日』に「日本共産党東京都委員会」内に「報知関係特別委員会」が特設され、その「戦略戦術の指導下にひたすら革命路線への奉仕に終始する一部日共党員の謀略」と語ったことが問題になり、日本共産党からの正式の抗議を受け、告訴される形勢にもある。

こうした報知労働者の夜明けのたたかいにうちこまれてきた黒い攻撃が、今までの印刷の第二組合づくりをはじめとする数々の組織破壊、人間破壊の攻撃であり、ついに今回の事態まで、岡本労務政策がエスカレートしたということである。

働く者がだれでも考えてそうしたいと思うこと——職場に差別や競争がなくて、仕事をほんとにわかる労働者が、イヤなことをイヤだといえること——こんなことが許されない事態は、なぜ、どこからくるんだろうか。われわれは、六〇年に〝サンケイ残酷物語〟が起こされ、七〇年に、同じ黒い主人公たちによって報知に攻撃が加えられてきていること、そして、きわめてささやかな労働者の願いや自発性をもふみにじっていくことでのみ情報、報道産業を成りたたせようとするモクロミ——やがて国民の考え方を勝手にソージューするためのツユバライが

進められているのだということを見抜いている。

報知の労働者は口ぐちにいう。

「会社のいいなりにはならない。ただそれだけのためにこんな目にあわなくてはいけないのか？　これが許せるか」

「暴力の恐怖を前に、目をつぶって、がまんしていれば報知はいったいどうなる」

「こんな事態が、白昼堂々とまかりとおるのか？　労使の問題を、会社は暴力で解決するのか？　民主主義を否定するものだ」

「それほど、オレたちを甘くみているのか」

「公正な報道をうたう新聞社でこんなことを許していいのか！　ここで沈黙すれば、社会正義なんか存在しない！」

「人間としてこんなクツジョクはない」

まさに、問題は一報知の労使紛争から〝民主主義を守れ〟のたたかいへ発展したのだ。

報知新聞の組合員はみんな今度の問題でどんな態度をとるかを、自分自身の良心の問題としてとらえたのだ。

だが、昨年来の情け無用の攻撃にたえられず落ちていった印刷第二組合と新聞の少数の人たちがいる。「そんなことはどうでもいい。新聞をだしさえすればいい」という一部会社につながったボスの呼びかけで、戦列を離れていった人たちが、外部からの臨時雇いの人と一緒に、暴力団に見守られながら、報知新聞をだしつづけている。

恐ろしいことである。会社に身を売り、社会的責任と人間の生きる道を放棄した人たちが右翼暴力集団のいる中でつくる新聞……それは暴力団のふるう凶器よりもさらに恐ろしい存在ではないだろうか。

初めて街角に立って

暴力団導入につづいて、組合が抗議と要求貫徹のストライキを決行したことにたいして四月二八日の東京報知印刷ロックアウトを皮切りに五月八日の大阪報知印刷にいたるまで、全面ロックアウトをかけて、不当にも全労働者を職場外にしめだした。

暴力団導入と全面ロックアウト――この最悪の事態の中で、七〇〇名の組合員は街頭に立ちビラをまき、各組合をまわって、支援を訴えつづけた。

「前略。私は高校三年の現実社会のきびしさを知らぬつまらない女の子です。でもこんな私でも、このような想像もできないようなことを聞いたら激怒せずにはいられません。私が初めてこの事件を知ったのは五月一日のメーデーの日、明治神宮の前でした。そのときは新聞社が監視労働の状態で仕事になるはずがない。そんなことがありうるのだろうかと思いながらも、その場かぎりのものでした。

そしてきょう渋谷駅で組合のチラシをもらいそれを読んでほんとうに驚いてしまったのです。私はなんの知識もなく、こんな手紙など書く資格などないかもしれません。でも善悪の区別はわかります。世間には〝他人のことにはまきこまれたくない〟と思っている人が多いと思います（私だってそうかもしれません）。でもそんな人でも心の中で労働組合を応援しているでしょう。私のこんな手紙が何の役に立つかわかりませんが、でもみんな正しい者に味方しています。正しい者は必ず勝ちます。ガンバッテください」

これは東京・世田谷の一人の女子高校生から五月一八日にとどいた手紙（原文のまま）である。この手紙を読んで、報知の労働者は感激し

た。運動部のある記者は次のように書いている。「街頭でのビラまきは、それはつらいものだった。肉体的な疲労よりは、精神的な屈辱感に耐えることの方がよりつらかった。しかし岡本らの無法経営者に屈服することを思えばやめられない。歯をくいしばって耐えた。その効果が目にみえてあがってくると元気もでた。なかでもこの手紙には心をうたれた。素朴だが、しっかりした判断はわたしたちの闘争が正しかったことを再認識させてくれたし、たたかいの広がりを肌で感じることができた」

岡本たち報知経営陣があらゆる常識も法制度も無視した攻撃をつづける以上、組合は新聞労連と地域の労働者の共闘を軸に、幅広い仲間のスクラムの中でたたかいを発展させなければならない。暴力団導入以来、一ヵ月ほどの間に約二五〇万枚のビラを、東京、大阪を中心に市民の中にまいた。一日で、約二〇万枚のビラを消化する。ビラは非常に評判よく、組合や団地、街頭でまいた後で、もっとないかという問い合わせが本部にくる。だから、大勢としては、今までの一労働組合のたたかいのビラまきとして空前の量と反響を呼んだといえる。もちろん、テレビと新聞からしめだされている状況で、二五〇万枚のビラでも、テレビの三〇分番組の影響力より小さいだろう。あくまでミニコミである。だが、それだけに、一人ひとりの労働者が一人ひとりの市民に手渡し、語りかける行動の中から、さまざまな反響と、報知労働者自身の血肉となる、貴重な体験が生まれている。

何しろ、ふだんは〝マスコミ〟をつくりだしているという自信で銀座大通りを肩で風を切っている記者たちのビラまきである。この闘いに入るまでは〝みすぼらしく、ケチなミニコミ〟と思い、街頭に立ってまくなどということを自分のこととして考えたことのない人種なのだ。

ビラの中味は自分たちの怒りと心をこめてつくられた立派なものであっても、それを手渡す行為は別問題である。W記者がやっと腹を決めて渡そうとしたら、受けとらない人にぶつかって、〝こんチクショウ！〟と思わず、腹の中でつぶやいていた。しかし、訴えているのは自分たちだと思い直して、またビラをさしだす。同じ労働者でも、報知印刷の若者たちのように威勢よくまけないのが報知の記者たち。自信がなくなって立っている時、読んでもどってきた人が、

「がんばって下さいよ！　ひどいね、岡本って社長は！」

などと、声をかけられると、嬉しさがこみあげてきて、胸があつくなる。

人の声がこんなにありがたいものか……新聞をつくっていて、一度も感じることのなかった感動を味わったと語る仲間が多い。

「ほんとに、こんなチッポケなことに感激するなんて……いや、小さくないんだ、あのおばさんも、超ミニの娘も、みんな俺たちを支えてくれてる、俺たちは孤立していない、東京都民の大半が俺たちを支持してくれるんだ」

ビラをまくことが大変な苦痛だったW記者の胸に、自信のようなものが湧いてきた。多くの市民に支持されているという実感の中で「報知の労働組合だって、こんな時になればやれるんだ。いや、こんなことでビビっていられるか！チクショク、岡本のヤツ！」

と、W記者のビラをまく手がみるまに、速くなっていった。

報知労組だけではない、集団行動にはなれているはずの報印労組でさえ、大量ビラまき宣伝の中で、組合員の気持が大きく変わっていった。

からだの前後に、たたかいの実情を撮った写真をぶら下げて、銀座を歩こうという戦術を決行する朝、Rさんは電車の急行にのらずに鈍行にとびのっていた。彼をそうさせたのは、銀座の表通りをまるでサンドイッチマンみたいに恥ずかしいカッコウで歩かなければならない任務から何とか逃げられれば、という気持だった。

〝……鈍行で行けば、待ち合わせ時刻におくれる……遅れてみんなが出発してくれればやらないでも……〟Rさんの心の中で、やはり、みんなにたいするうしろめたさより、逃げたい気持が強かった。集会場所の数寄屋橋公園についたのは、予定時刻をだいぶ過ぎていた。みんな待っていた……Rさんのくるのを、みんな、しんぼう強く待っていてくれたのだ。

「おーっ、きたなぁ！」

という仲間の声がRさんの胸につきささった。翌日、職場集会でRさんは腹のなかにたまっていた気持をぶちまけた。自分がどんなに恥ずかしい気持をもっていたかを率直に話した。

カンボジアに侵入した南ベトナム軍ではありません。5月27日，報知新聞社にかけつけた右翼暴力団の一部です。

「……みんなが、この私のことを信頼して、待っていてくれたと思うと、申しわけなくて……」

Rさんは、みんなに頭を下げた。

「わかるよ、Rさん……俺だって同じさ！恥ずかしいよ、銀座のサンドイッチマンは、俺たち商売じゃねえもん！　俺だって、サングラスかけたんだ……」

「そうだよ、俺もそうだよ！こんなイヤなことなんでやんなきゃなんねえんだって、考えたらよ、銀座歩いてて、頭にきちまってよ……」

Rさんは、みんなの言葉をきいていて涙がこみあげてきた。

「もし、負けたらよ、岡本に負けたらよ、もっとイヤなことやらされるもんなあ……」

Rさんの心の隅に残っていた恥ずかしさも、うしろめたさも、みんなの一言をかみしめる中でいつの間にか消えていく思いだった。

Ⅱ　記者たちは〝不正の現実〟を許さない

1　〝正しい記事〟のため　今は書かない

記者さんよガンバッテくれ――取材先の支援

会社の不法不当な全面ロックアウト攻撃によって、現在、京橋の正路喜社労組の中を拠点として活動している報知争議団の中には一〇八名の取材記者たちがいる。担当はプロ野球、一般スポーツ、相撲といったスポーツ関係。芸能、放送、リクリエーションといった文化関係に分かれる。

みんなふだんの仕事は、花形スポーツマンやスターたちとの会見であり、テレビ局、劇場、競技場、競輪、競馬場、ジムといった、ショーの開催場所の歴訪である。はなやかではあるが忙しく、席を暖める暇もない浮草稼業である。一流スポーツ紙報知を代表してスターたちと対等につきあうという自負とともにスターシステムやギャンブルの周辺で生きなければならない悲哀をいつも腹の中に雑然と同居させながらかけずりまわっている。

理由はなんであれ、新聞・印刷両労働組合の中で一番定着性がうすく、仲間との団結に熱心でない人種の集まりだったことは間違いない。〝記者は文化人であって、労働者というよりペ

前田武彦氏もラジオ関東で〝報知問題〟を放送

ンで世の中をわたる独立自由人である〟という意識を会社から常にうえつけられるし、孤立して歩くことの多い仕事の状態がどうしても〝団結〟や〝組合〟とはあまりカンケイないという気持にさせる。

その記者たちが暴力団と全面ロックアウトというキチガイじみた岡本労政のやり方で、一夜にして街頭にほおりだされ、デスクもペンもとりあげられてしまったのである。プロ野球分会三〇名中二九名の脱落という事態の中で、印刷にならって、報知でも第二組合づくりかと思っていた矢先のできごとである。〝まさか、記者の仕事までを……〟という期待は無惨にぶち破られた。記者たちは、とにかくこの異常な事態がトサカにきた。なぜこんなにまでして、組合員を敵視するのか……もはや岡本は上司でもなければ経営者でもない、暴力組織のボスでしかないではないか……みんな、驚き、悲し

み、激怒した。みんなと一緒に、生まれて初めてのビラをまき、盛り場や団地での宣伝行動にも加わった。また、能力とふだんのつき合いをいかして、スターや文化人たちに、事の真相を訴えて歩いた。反響はすぐあらわれた。作家の村上元三氏、梶山季之氏、タレントの青島幸男氏、前田武彦氏、俳優の藤巻潤氏、司葉子さんなど、ぞくぞくと話を聞き、組合の立場を支持してくれた。スポーツ関係者も、大関清国関やレスリング・フェザー級元世界チャンピオン渡辺長武氏など快く気持を語ってくれた。渡辺氏は現在の職場、電通で、つぎのように語った。

「新聞をみて、どうもおかしいと思っていた。まったく、アンフェアとしかいいようがない。暴力団を導入して紛争を解決しようなんてもってのほかだ。スポーツにもルールがあるように、労使間にも当然、ルールがあってしかるべきだ。私も電通の組合員であり これまで何度も闘争に参加してきたが、これほど残酷無比な組合つぶしを経験したことがない。だいたいこうした無法な手段は勝味がないからとることなのだが、まったく、小学生以下の行動といっていい。会社の経営にたずさわる者は全員、丸坊主になり、全組合員の前で頭を下げるべきだ」

予想していなかった人たちの支持の声に記者たちは励まされる。だが、やっぱり自分の取材先が気になる。取材先の選手や他社の記者たちから仲間はずれになり、もう永久に仕事ができなくなるのでは……そんな心の動揺がボクシング担当のM記者にもあった。

それは、世界フェザー級チャンピオン西城選手の公開練習の時だった。スパーリング終了後の金平マネージャーのインタービューになった。記者たちの顔を見回して、同マネージャーはかたく口をつぐんでしまった。他社の記者た

ちは突然の異変に驚いたが、理由は会社の工作に組合を裏切った報知の記者がその席にいたことだった。組合を裏切った記者への取材協力を拒否してくれたのである。

このことを聞いて、M記者は眼頭がジーンと熱くなった。他社のボクシング担当記者たちが協力してくれたのだ……。彼らが報知闘争の実情を金平マネージャーに話し、組合員への友情から「報知締め出し」の行動にでてくれたのだ。金平マネージャーも自発的にルール違反の報知に口をつぐんでくれたのだ……嬉しかった！M記者だけではない報知・報印のすべての組合員が正義を愛し、ルールを守ってくれたスポーツ関係同僚と選手の友情に、報知闘争を支援してくれる人々の層の厚さを知ることができた。われわれの後には大勢の不正を憎む日本人が見守っていてくれるのだ……初めての感動が記者たちの体内をつきあげた。

活字で埋まった白紙

全面ロックアウトの結果、報知新聞の紙面はどう変わっただろうか？　プロ野球を除く他の分会の脱落者は非常に少ない。ほとんど大半が組合の隊列でたたかいつづけている。当然、プロ野球欄以外の紙面はガタ落ちになった。

「このところ報知新聞の紙面には相撲記事がめっきり少なくなった。さびしいことだ。その理由が争議にあると聞いて……」（大関清国関談）

たかが、スポーツ紙がという人たちもいる。だが、生活をかけて書きつづける記者の紙面にたいする愛着は、政治部記者も運動部記者も変わりはない。目に見えて内容が落ちていく〝おれの新聞、報知〟を毎日みるのがつらかった。

「あ、この記事は四月にとっておいたやつを使いやがった！」「つぎはぎで、こんなヒデエ

記事にしちまった！」

まるで、わが子を切りきざまれる思いである。それも、最初のうちはストックで間に合わせることができたが、ロックアウトが一〇、二〇日となるとそうはいかない。そこで臨時記者のオソマツ記事や外部の執筆者たちの依頼原稿で連日、必死に埋めなければならない。

親会社読売や共同通信の特信GH版、芸能、放送ニュースから回してもらったらしい記事も目につく。見る人がみれば内容だけでなく、組みのまずさ、印刷のひどさまで、一見してわかることだ。読める紙面ではない、それはもはや〝活字で埋まった白紙〟と呼ぶにふさわしかった。

会社ももちろんそのことはわかる。読者を逃がさないためにも、何とかカッコいい新聞の水準を維持したいと考える。そして、ペンをもちたいという記者の泣き所をついて、ささやきかけてくる。みんなと離れて、一人になった寝室の電話に部長の声が響く。

「今の紙面を見て、悲しく思わないかい？君も僕も同じ記者だよ。記者魂は変わらない。どうして、君は仕事をしないんだ？　報知新聞の生命のために……」

泣かせる浪花節ではないか、いや悪女のささやきだろうか。ホロっとさせられ、すべて目をつぶって新聞のために……と心の悪魔が頭をもたげる。

たたかいつづけている多くの記者たちが、一度や二度は、こんなはたらきかけと動揺を経験している。

S記者もその晩、先輩の切り崩しの電話をもらっていた。〝女房、子どものため、記者生活に傷をつけないために……〟はたらきかけは、すべてアカ攻撃と浪花節の組み合わせだった。いっていることはデタラメでも〝やっぱり書き

たい……〃という強い欲求が記者の胸を一杯にした彼は、ある〃価値あるニュース〃を握っているのだ！

記事はすぐにでも書ける。今日の締切りに間に合わせて読者に一刻も早く知らせたい。だがそれは仲間を裏切ること……でも、ロックアウトはいつまで続くかもしれず、その間に他社の記者がスクープする可能性もあるし、半月もたてば自然に公表されるかもしれない……彼は悩みつづけた。書きたいという記者の欲求と、権力とゼニと無法の岡本と妥協なくたたかうという人間の良心の間をさまよい考え続けた。二日三晩考えて、やっと一つの結論に到達した。

「新聞記者はただ記事を書けばいいというものではない。それ以前に正邪をはっきり見分ける判断力が絶対必要なんだ。社内に暴力団をいれ、社員をたたきだす常識はずれ、人間無視の労務政策をとる会社のやり方に目をつぶってどうして正しい記事、読者に納得してもらえる記事が書けよう。身近な不正を許して書いた記事は、たとえどんなに立派なものでも読者をあざむくことに変わりはない。正義を追求し、良心に従って生きる、つまりごくあたり前の人間として使命を果たすことがそのまま記者として読者に責任をもつことになるのだ……」

まず、何よりも〃人間であろう〃と決意したS記者の心にはもう迷いはなかった。闘争が解決した時には、おそらくニュースの価値はゼロになっているだろう。だが、万に一つでも正しいニュースを堂々と発表できるチャンスをみんなのスクラムでかちとることができたら……記者はどんな時にも、敏速にいい記事を準備することが使命であるというモットーにしたがい、彼はその記事を書いた。そしていつでも渡せるように、原稿を内ポケットに大切にしまって、仲間たちの待つ組合事務所を目指して家を出

た。

みんな泣いた集会

一日一日がたたかいである。たえず襲ってくる動揺の中で、一つひとつ自分の弱さを確かめながら、報知系三単組七〇〇人の団結は少しずつ固まっていった。四月一五日に暴力団を導入して、主として報知印刷労組への攻撃を中心にしだいにエスカレートしていった会社側のやり口の悪どさが頂点に達し、報知全労働者にとって忘れられない決定的な日となったのは五月二日だった。

この日まで、編集記者をはじめ、整理・校閲分会を除く内勤組合員の気持には割り切れないなにかがあった。それは組合の力の強い部分といわれ、前日までにすでに会社がロックアウトをかけてきていた東京・大阪の印刷と整理・校閲分会などと差別して支配しようとしている会社の攻撃の意図についてだった。「プロ野球分会が全員脱落した」という情報が知らされる状況の中で、その日の夕方、ついに東京本社に全面ロックアウトがかけられた。会社の全面ロック通告後、一時間で飯田橋富士紡会館で緊急集会が開かれた。喫茶店に集まって、この日のたたかいのまとめをしている組合員の耳にこのニュースが伝えられ、まもなく会場には緊張した組合員の顔がつぎつぎと集まってきた。

「これですっきりしたぜ」「整理・校閲の仲間入りができたぜ」という威勢のいい声がとび意外に明るい組合員の表情だった。

俺たちの働く場を勝手にうばおうとすることは断じて許せない——全組合員をほおりだす全面ロックアウトへの強い怒りが全員をつつんだ。同時にみんな一緒にやられたという連帯感が重なってかえって、みんなの気持を一つにさせることにつながったのだろう。新聞労連神吉

争議対策部長がこのみんなの気持にこたえるように力強く挨拶した。

「もう、この闘争は勝ちました。無謀な全面ロックアウトを打ったことそれをうける皆さんのこの明るい顔——私は驚きました。早期勝利の確信をいよいよ深めました……」

事業・経理・出版、そして編集の各分会員がつぎつぎに立って、団結とたたかいへの積極的な発言がつづいた。だが、一人ひとりの組合員をとりまく状況は決して、平坦な道ではなかった。主婦、親子、兄弟、先輩とあらゆる関係の中で、愛情を引きさかれ、涙をのんでそれぞれの道にすすまなければならない、つらく厳しい試練に直面していた。Fさんはいった。

「仲間の皆さんに対して、ほんとうに申しわけないことになってしまいました……兄貴が組合をぬけてしまいました……すみません……私は、兄弟の絆までも引き裂く岡本労政にたいして……心の底から憤りを感じて……皆さん、どうか、私が兄のぶんまで頑張りますから、どうか、許して下さい……」

そっと、涙をふいている人もいる。人ごとではないのだ。ある人は親子バラバラ、ある人は親戚や紹介者と対決しなければならなかった。

「私は入社する時……親戚を通して、社内のある人にコネをつけてもらいました……私にたいして脱退工作があるとすれば、その筋からだと思います。もしその筋で話があっても……私は……たとえ、親戚のつき合いを立ち切ることになっても、私は、拒否します……貧乏しても正義を通すのだと、私の父が……父がいってくれました……」

いつも、お互いダジャレしかいい合わない仲間たちが、腹の底からしぼりだすように、真実を語った。

佐宗さんがきた。佐宗さんが……

集まりは場所を日本学生会館に移し、整理・校閲分会の人たちも加えて、翌日も続けられた。

写真部のB君は、前日尊敬する同じ部のデスク・Hさんが来てないのをみて、家に行って「一生懸命、話をしてきてもらいます」と発言していたが、この日、そのHさんが会場にいるのをみて「よかった。本当にうれしい」と涙を流しながら喜びを語った。

「佐宗さんがきた。佐宗さんが……」と数日前に速記のO君を感激させた、野球部ただひとりの〝生き残り〟の佐宗さんは、報知内の〝エリート〟記者とみられているプロ野球分会が脱落し、その中で一人孤立することになっても、このたたかいの中で〝自分の心の中に良心の歴史をつくりたい〟とその気持を報告した。激しい感動の拍手が会場を圧した。

報知労組・古川委員長を先頭として、この二日間の集会の中でくりひろげられた、組合員の真実の吐露の中には、いまだかつて報知の組合になかった感激と人間のふれ合いがあった。そこにはすべてがあった、涙、笑い、怒り……人間的な感情のすべてがほとばしりでた。岡本支配体制の職場の中では味わうことのなかったみずみずしい人間同士のふれ合いの芽がそこにあった。記者も交換嬢も印刷労働者も職場の中でお互いの間を隔てていたカベがとり払われ、苦闘の中ではじめて知った、人間の自由と連帯の喜びをかみしめていた。

読売の「植民地」といわれ、読売→報知新聞→報知印刷東京→報知印刷大阪と厳然と上から下まで組まれた序列支配は、報知全労働者の日常生活を支配し、お互いの自由な交流を妨げてきた。その労働者同士のいがみあいと面従腹背

ひどい暴力，この組合員は鼻柱にヒビが入った

の対立感情こそ、資本家の喜んできた、職場支配の中味だったのだ。今、その体制が音を立てて崩れつつある。岡本「弁務官」による、血も涙もない無法植民地政治に対して、全植民地住民が声をあげはじめたのだ。国家権力と財界の援助をうけた読売資本と報知経営者の攻撃は決して、甘いものではない。個人も組織も血のふきでるたたかいの毎日が続くだろう。だが、たたかうすべての報知労働者にとって、五月二日の団結集会は、長く苦しい人間復帰のたたかいの幕明けとして、永久に胸にきざみこまれるに違いない。

たった一人残っても

会社の誘いにのらず、頑張り続ける記者たちの気持はさまざまである。待遇問題で社長に率直な意見を告げて左遷された経験をもつ大阪のA記者はいう。

「組合のない会社の社員がいかに悲しいか、僕は身をもって知っている。だから、このたたかいには最後まで参加するつもりだ」

また四二年秋闘の時、嘱託・臨時の社員化のたたかいで本採用となった、同じ大阪のBさんは「私の幸せは組合とともにあるような気がするのです。だから……」と、心からいう。

だが、一方では、春闘の中でも「あれはイヤだ！」と腕章もハチ巻きもしなかった仲間が悪いことはイヤだとがんばっている。とにかく、文化分会を例にとれば、東京・大阪あわせて、四四名中、脱落したのは三名だけ。だから、残った人たちの個性も趣味も心情も、実にバラエティーにとんでいる。

「公正中立を自ら否定するものだ！　もう、黙っているわけにはいかないよ」というDさんたちの意見は、組合活動にそれほど熱心でなかった人たちの気持を率直に代表している。

ここで、前述の佐宗記者の手記を紹介したい。結束の強い分会ではない、文字通り彼一人で旗をかかげつづけるプロ野球分会の良心を、全組合員、いや報知闘争を支援するすべての新聞に生きる人びとの、すべての日本の働く人びとの心としようではないか。

〔手記〕　総勢三十人の野球分会（東京本社）の中で、組合に残ったのはぼく一人。五月二日に全面ロックアウトを受けたあと、あるデスクから電話があった。「入社一年目で不幸なことになってしまった。われわれは新聞を作りたい一心で働いているが、君もこの気持はわかってくれるだろう。組合を脱退して社内に入るもよし、組合の方針に沿って闘争を続けるもよし。ただ君の良心に忠実であってほしい」

五月一日、メーデー。その日ぼくは二十四時間全面ストライキの指令にそむいて、ある球団のルーキーの取材で多摩川へ出かけていた。ひと通り話を取ってデスクに連絡したのが午後三時頃。そ

うしたら、やっかいな問題が起きていた。その球団へ入団した選手の契約金がピンハネされているらしいという報道があったのだ。

「すぐに事実を確かめてくれ」――ファーム選手が練習している多摩川へまた取って返した。

社へあがったのが午後七時過ぎ。机に向って鉛筆を取ったとき、先輩記者からドナリつけられた。「お前は自分の好きなときだけ仕事をするのか！」なるほど、この日はスト指令を返上してまで取材に飛び回っていた。指令が出ると職場を去っていったそれまでの自分の行動とは、確かに矛盾している。だが、一息おいてからその言葉に対して反発を感じた。「誰が喜んでストに参加しているものか。まだろくに原稿が書けない自分にいらだっているのに……」鉛筆を放り出したら、むしょうに涙が出てきた。二人の先輩から暖かいアドバイスを受けたあと、わき目もふらずに社を出た。

新聞記者は進歩的であれ、とよくいわれる。その時代の大勢は、その時代の体制的思考の反映であるならば、その中にあって、さまざまな社会現象、事件を分析し、整理する姿勢は、その流れにまきこまれない旺盛な批判精神、つまり常に野党的立場を堅持することではないだろうか。

元西鉄・永易投手の八百長事件以来、プロ野球は大揺れ。〝黒い霧〟を追及し、たまったウミをしぼり出していっているのは、不正を許さない新聞記者の野党的情熱だと、ぼくは思う。

ひるがえって社内を見るとどうだろう。経営者は不当労働行為を平然とやってのけ、労働者が立ちあがれば分裂攻撃をかける。それでも足りないとみるやガードマンと称して右翼暴力団を導入する。

「新聞を作らなければいけない。読者を見捨ててはいけない」

――その通りだが、読売資本を背景にした強引な組合つぶしが不正でなければ一体何だろうか。新聞製作の行程を無視した整理、校閲分会へのロッ

クアウト、そして一気に全面ロックアウト。報知の経営者は本当に新聞を愛しているのだろうか。

社会悪に敢然と立ち向かうためには曇りのない澄んだ瞳を持ちたいと、ぼくは思う。「職場の先輩と気まずくならないためには、自分の気持を押し殺さなければいけない時もある」と説得されたこともあった。「お前は仕事を覚えるのが第一だ。そのためには組合のことも忘れて、バカになって原稿を書いてみたらどうか」とさとされたこともあった。しかし、いったん自分の身から落とした良心を拾い上げることは困難だろう。人間として最も根底の部分を問われているこの闘争の中で、あえて野球分会の少数意見をとった。淋しくなんかない。「ガンバレよ」と肩をたたいてくれる多くの仲間がいる。自分達の団結の力を信頼する笑顔がぼくのまわりにいっぱいある。たったひとり野球分会をはなれて、はじめて組合の集会に出席して発言したとき「自分の心の中に、良心の歴史をつくりたい」——不意に出てしまったこんな言葉。だが何度でもこれをつぶやきながら歩きたいと思っている。

（佐宗公雄）

2　心を売った仲間たちへ

ギャンブルにも女にも弱いが……

仲間たちが忙しく出入りし、新聞社の編集部をそっくりそのまま移動して、さらに人間的に遠慮なく勝手にしゃべり合う事務所の騒音の中で、ある記者がつぶやいた。

「ほんとに意外だよなあ。記者連中がこんなにガンバッてるなんてなあ」

「何いってんだ、自分だって記者じゃねえか！」

「いや、だからそう思うんだよ。二〇日、もうすぐ、一月になるんだぜ、ロックに入ってから……俺の計算ではその間にはまず、半分ぐら

いになっちまうと思ってたけどなあ、俺も含めてな……やっぱり岡本の野郎がよっぽど悪いヤツなんだよ……」

記者がそんなに長くガンバレるわけがない——当の記者自身がそうつぶやき、驚いていることの中に、今度の報知闘争の特徴がでている。記者が決して強い人間の集団でないことは記者自身が一番知っている。だから、弱きを自認もしているし、他人にいわれても怒りはしない。遊びもギャンブルもすきだし、もちろん酒も女も、それにみえもあるしカッコよさも気にする……その気になって、ゼニと権力をもってるやつにつつかれれば、一番モロイところをふんだんにもっている新聞記者が団結しなくてあたり前……そのあたり前の現象が起こらずに、オシャレのブンヤさんたちが、腕章まいてビラをまきオルグにも行く。やりそうもない人がやりだしたことの中に、報知闘争が勤勉でまともにたたかう労働者だけでなく、四角四面にいえば、資本主義的害悪にいささか毒されギャンブルその他少なくとも大半の女性に総スカンくいそうなことを愛する人種までが支持する理由がある。すなわち、人間を愛する、すべての人々の心琴にふれる人間性無視が報知岡本体制の本質にあるということであり人権闘争といわれる所以である。

スポーツをゼニや権力で変質させない、黒い霧は許せない、そして、ギャンブルでも八百長はもってのほか。この立場の中に、現在のスポーツ記者の民主主義と良心の一線がある。

だから、組合分裂の加担者、プロ野球分会の西村昇・田村大五両記者が今問題になっている、プロ野球〝黒い霧事件〟のもみ消しに懸命になっている変節が許せないのだ。この二人の記者は最初に永易八百長事件をスクープした当人でありながら、問題が球界全体に及ぼす形勢

の中で、永易の証言はウソだと手のひらを返すような臭いものにフタをする記事をかきだしたのだ。

今、たたかいつづける記者たちは、この二人の「不正をもみ消す、ドレイのブン屋魂」が、組合を脱落し仲間を裏切る精神につながっていることをはっきり知らされた。

〝アカと暴力で報知新聞をけがす組合を離れ読者のため、人間らしく働く報知の職場〟と彼らがいう職場は今どうなっているだろうか？臨時を含めて、三〇〇人の人間でメチャクチャな労働強化と人間無視の新聞づくりが強行されている。活字で埋めた白紙のような新聞づくりでも慣れない三〇〇人の労働者にとっては命がけの労働なのだ。だから、連日の深夜労働でスキャップ（スト破りのための臨時）の金竹慶二さん（六一歳）は心臓マヒでなくなった。それも手洗所の中で。

〝仕事をするためにぬける。僕は専門の車、山、バレーボールの仕事しかしない〟といってN記者は脱落していった。そして今、彼は相撲の初日には国技館にかり出され、エベレスト・スキー滑降のニュースが入った時は、一晩で部長と二人で二ページの紙面を埋める重労働をさせられているのだ。

われわれは外から想像するしかないのだが、六尺豊かなヒゲ面の暴力団にウロつかれ、職制に監視されつつ、夜昼なしの労働を強制される職場のふん囲気は想像を絶するものがあるようだ。わずかに残った組合の仲間たち、臨時労働者組合の連絡員分会の人たちが彼らに〝スパイ〟とののしられながら、歯を食いしばって腕章を腕にはたらきつづけ、一日一日の職場の現実を知らせてくれる。彼らは、みんな若い高校生と大学生たち……昼働いて夜学ぶ者。夜働いて昼学ぶものとして、職場に組合の旗をかかげ

つづけているのだ。

「組合が職場にあることが、僕たち働く者にとって、どんな意味があるか、今こそはっきりわかりました。どんなにつらくても、組合の旗をおろしません。皆さんにやさしくされたありがたさをかみしめて、皆さんのかわりに職場に組合旗をかかげつづけます」とある臨時の仲間は昼間のつらさ、くやしさをブチまけるように語ってくれた。

つらいのは臨時労働者の組合員だけではない。脱落した仲間たちも膝を屈したその日から、組合切り崩しの任務を負わされ、恥も外聞もなく説得電話をしなければならない。組合員に泣いて脱落のつらさを語って出ていった翌日から、その行動に加わらなければ、会社の信用をうることはできない。たたかいは肉を切り、骨をきざむ。黙って仕事だけしていればいいというわけにいかないのだ。会社は組合の団結をぶちこわすために最高の成績をあげた人間に、出世を約束する。だから、脱落はしたが組合員に申しわけないという気持が少しでもある人間は、社屋の中で、今、冷遇されている。

いったん切り崩し工作にたえかねて脱落し、翌日組合に帰ってきた写真部のHさんはいう。

「きのうの夜、会社の中に入りました……イヤです……口では、何とも表現できないような異様な空気が……とても。僕にはガマンできませんでした……ガマンできなくて、気がついたら、僕は会社を出てきていました……」

正しいことが勝つとは限らない。たたかいは強いものが勝つ。今、組合は編集部の弱虫記者を先頭に、悪にまけないための力をつけようとみんなで、力を寄せ合っている。

その目的は一つ、何よりも今までの報知、職場で働くものがモノをいえる職場をとり返すために……。

Ⅲ　みんなで、みんなの職場を作ってきた

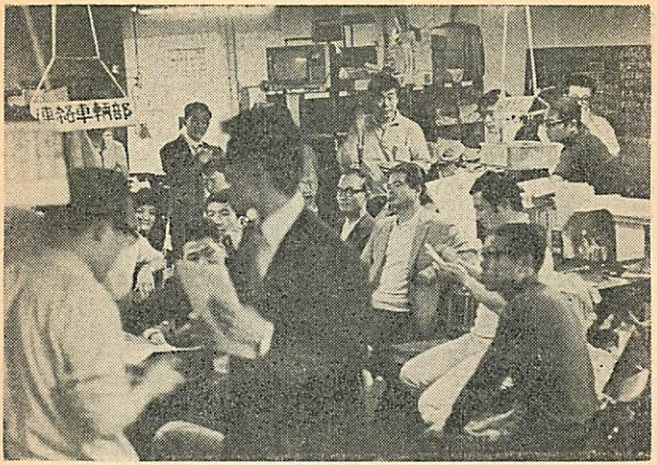
1　争議団事務所は〝生きのいい編集局〟

喫茶室「ロック」まで登場

全面ロックアウトによって、情け容赦なく街頭におっぽりだされた報知労働者ー東西の新聞、印刷、連絡員を除く臨時労働組合を合わせて総勢七〇〇名。こんなに大勢の労働者が、一挙に職場を追い出されて争議団を編成し、外に拠点を定めてたたかいつづける例は最近では少ない。しかも、東京のど真ん中、大読売資本の系列会社で労働者弾圧のタレント労務屋と飯島ボス麾下の右翼暴力団精鋭の合作で、堂々と行なわれた白昼劇……東京有楽町を中心に千代田区内の労働者、市民はこの突如として起こった、資本の残酷非道な手口に驚き、くわしい事情はわからないまでも労働者の立場に同情した。

報知印刷の労働者が右翼暴力団の制服写真入りのプラカードを前後にぶら下げて、銀座通りをたたかうサンドイッチマンよろしく練り歩いた時にも、こんなことがあった。

四丁目のおまわりが顔色変えてとんできて、暴力団の制服姿と自分の制服とを一生懸命見くらべて、けわしい顔をしている。



連絡所はまるで編集局，明るい顔がならぶ

「似てるけど、これはかの有名なる報知占領中の右翼暴力団の姿……おまわりさん、知ってるだろう。ホント悪い奴なんだよ……」

おまわりはニガ虫をかみつぶしたような顔でいった。

「……しょうがないなあ、まあキミら、地元だからなあ、大目にみとこう……」

警察官の侮辱写真でないとわかったおまわりは写真を横目でみながら、モッタイをつけていった。

おまわりが地元だからというのもお笑いだが、正路喜社一階の物置の大掃除が終わり、報知争議団連絡所が完成してまもなく、近所の喫茶店のマネージャーがていねいにアイサツに来た。

「あの……どちらの会社さんでございましょうか……なにぶんお引き立てのほどを…」

ウシシシ……建物は少々汚いが、机、椅子、

電話がずらりと並びデスクにはエンピツ、ボールペン、はさみ、のりのささった鉛筆立てに原稿用紙までそろって、おまけにカッコいい記者たちも多いときているから、コーヒー屋のおやじが会社の引っ越しと感違いしても不思議はない。

いやしかし、人間の習性は恐しいものである。なんとなく編集局を小型にしたようなふん囲気を、みんなでワッサモッサとつくりあげてしまったのである。はげちょろけの玄関の前には、個人所有物をかき集めた数台の車が出動を待っている。違いは報知の社旗がフロントにないことと、しょうしゃなスポーツカーからダットサンの荷物車まであること。玄関の右手には報知新聞ならぬ、闘争ニュースの数万の包み。

部屋に入ると右手は喫茶室「ロック」コーヒー一杯二〇円、ゆで卵一個二〇円、ラーメン三〇円、卵入り五〇円とメニューが壁に貼ってある。「セルフサービスでお願いします」というはり紙もある。最初は女子が交替でサービスしていたが、女子組合員だけ労働強化になるという要求の結果、改善されたものである。

部屋は全体を六つに仕切り、喫茶「ロック」の隣の机は、写真部デスクと暗室。写真部員が緊急出動にそなえている。まん中の右側のデスクは、車両連絡デスク。配車は一時間前にお願いしますというはり紙があり、自動車部員が待機している。左側は機関紙『闘う報知』の編集総合デスク。日報用原稿と書いた原稿はおりこみ用の籠が下がっている。一番奥の左手は、報知印刷連絡デスク。右側は報知新聞労組の本部デスク。委員長、書記長をはじめ、組合の幹部と、各部次長・主任デスクたち組合に残ったおエラ方社員が同居している。

まことにみごとな闘争本部兼編集室である。街頭をさ迷って、坐る場所もなかった七〇〇人

の労働者の拠点ができたのだ。そしてデスクの前に坐りエンピツを握って原稿用紙に向かう時、記者たちはなんともいえない安らぎをおぼえる。目の前の電話がジャンと鳴り、習性どおり、秒を争って受話器を耳にする。

このふん囲気、いい新聞ができるぜ！

「はい、文化部じゃねえ、京橋です……あ、どうも……じゃ、至急とびます！（電話を置き）前武さん、六時、ラジ関だよ」と、H記者が叫ぶ。自動車部のUさんと写真部のOさんが同時立ち上がり、自動車に走る。機敏さと機動性はいつもと同じである。三人は、ポンコツ車にとびのって、ラジオ関東にいる前田武彦氏に取材にいく。中味は報知経営者の非道を放送しようとして、中止されたニュースと顔写真をとるためである。形はそっくり同じだが、内容はたたかう労働者の真実の報道取材なのだ。誰にも遠慮せずに真実を取材し、ペンをふるいカメラをむけることのできる自由の中で、HもOも職場で味わうことのできなかった働く仲間のチームワークの素晴らしさを感じていた。Hがつぶやいた。

「今新聞つくらせたら、ホントに、いい新聞ができるぜ！」

取材記者だけではない。それぞれのパートが能力をいかして、たたかう報知争議団の各部署を受けもっている。写真部は争議資金獲得用にペルシャ猫をモデルにした半年分のカレンダーをつくるし、技術報道部は電話をはじめ、室内電気配線を全部やる。経理部は闘争財政の管理配分をするし、交換嬢は電話応待と宣伝カーのマイク教宣をひきうける。

「だめだよ、Kちゃん用件もちゃんと聞いといてくれなくちゃ。会社じゃないんだぜ、君も組合を代表して相手の用件聞いとかなくちゃ！」

「あら、そうだったわね」

会社の交換嬢は相手の名前と取りつぎ先さえきけば用が足りたのである。労働の習慣は仲々変わらない。だがいい合っている記者と女子組合員の間にこんなに自然で民主的な会話とふん囲気が、かつてあったことがあるだろうか？あの五月二日の全面ロックアウト後の集会の時感じた、同じ労働者だという連帯感と感動がこうして日常のたたかいの生活のリズムになってきたのだ。今まで、お互いの間にこえることのできない高い壁があると信じこんでいた世界が音をたててくずれたのだ。次長デスクも売れっ子記者も、自動車部員も交換嬢も、連絡員も印刷労働者もみんな同じ労働者——みんなの職場・人間らしい職場「報知」を、壁は汚れてはいるが生き生きとした人間の肌がふれあう、京橋闘争本部の中でかちとったこの団結の力でとりもどしたい。なんとしても俺たちの、わたしたちの働きやすい職場「報知」をとりもどしたい。この気持が争議団のすべての仲間を結び、二〇日、一ヵ月とたたかいつづける中で連帯のきずなになっていた。

今、報知争議団に結集するすべての労働者が帰りたいと胸に描いている報知の職場は、かつてどんな状態だったのだろうか？

火事でも輪転を止めない

五月二六日午前〇時すぎ、ロックアウトの報知新聞社屋七階寝室から出火、二〇〇平方メートルを焼き、暴力団員二名が軽傷を負う事件が発生した。

消火作業のために水が滝のように流れ社屋は巻きとり職場のある地下まで水びたしになり、近所の人びとは、玄関をトリデのように囲った異様なビルから火がふくのを恐怖の目でみつめてつぶやいた。

「労働者追いだして、暴力団が夜昼うろついて、今度は火事だ。いったいなんという会社だ！」

市民の怒りとともに、労働者にとって大きなショックだったのは、この火事の中で岡本社長が輪転機を止めずに、労働者を働きつづけさせたという事実だった。

「中の労働者を虫ケラと思ってんだ！」

「チクショウ、岡本の野郎！」

輪転分会の組合員は怒りに声をふるわせて、ドナった。つい最近もスキャップを一人殺している。労働者をもうけのための消耗品にする岡本の残忍さを、火事の中で見せつけられた報知印刷の労働者たちは、昔のことを思いだしていた。組合もなく、ほんとに虫ケラのように安月給でこきつかわれていた昔のことを。

報知印刷労組が誕生したのは昭和三七年、それまでの印刷職場は、プロ野球ブームで急速にかき集められた労働者が、日を追って増えていく発行部数を消化するために、昼も夜もなく、自分が何時に家へ帰れるのかもわからない超重労働に追いまくられていた。

「人間誰しも会社から帰れる時間ぐらい知る心要があります。精神的にも肉体的にも疲れはて退社していく人が後を絶えませんでした。人間の生活ではなかったのです。賃金でも時給で日給制でした。残業しても割増しもつきません。一時間働いて六〇～七〇円です。一カ月にしてもせいぜい一万四〇〇〇から五〇〇〇円の賃金です。しかも夜勤が多いため帰りの車代もでませんから必然的に会社に寝泊りしなければなりませんでした……」

これがある印刷労働者が語るその頃の印刷職場の現実だ。これだけではない。寝室とは名ばかり、ドヤのかいこ棚ベッドの方がまだ衛生的であるほど、異様な悪臭がたちこめ、ふとんは

アカとアブラに汚れていた。しかも数が少ないから早くもぐりこまないと場所もない。やっと仲間をつきのけて場所を確保した途端に、真下の輪転機が一二〇ホーンの轟音をあげて始動する。人間が眠る環境ではない。物理的環境に加えて印刷職場独特の徒弟的人間関係が頭の上にのしかかる。

「風呂へいけば先輩の背中を流し、タバコ買いに、食事のおかず買いまでやらされ、気に入られないとぶんなぐられる……」

読売巨人軍＝報知新聞というイメージでカッコいい職場を連想して、入社してきた多くの若者たちの幻想はいっぺんにふっとぶ。絶望しても、どうしようもない。

若者たちは、真夜中の屋上にかけあがって、大声で怒鳴るしか胸につっかえている憤りを発散させる方法を知らなかった

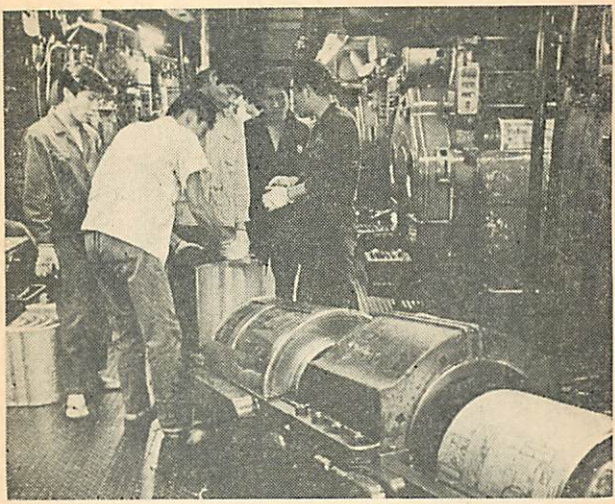
ある夜、いつものように、若者たちが屋上にガン首を並べてよどんだ東京の夜空をぼんやりみつめていると突然、隣でシャーシャーという音がきこえた。Cがズボンの前をはだけていた。Dも黙って、Cにならった。EもFも……シャーシャーシャー、若者たちは憤りの目を虚空に向けたまま、職制たちのいる階下めがけて悲しき抵抗の涙雨をふらしつづけた。

そしてまもなく報知新聞労組の援助をうけ、小便ではなく、働くものの赤旗をかかげて、報知印制労働組合がうぶ声をあげたのだ。人間の働く職場づくりを目ざして！

2　紙どめストライキから三単組共闘へ

四九時間ストライキが教えてくれた

安酒をあおって疲れをゴマかせばメシがくえず、ギャンブルに給料をぶちこんで、むなし



輪転職場、明るい職場めざしがんばってきた

く、すき腹かかえて、女を夢みる生活から労働者は立ち上がった。大盛ライスにバターとみそ汁で食う奴。かならず、一食ぬく奴。インスタントラーメンだけですごす奴……報知印刷労働者の低賃金と劣悪な労働条件をなくすためのたたかいは、おさえにおさえた青年のエネルギーとともに職場から職場へと広がっていった。

若者たちは一つ一つ学びながら、職場を人間の場所にするため、ねばり強く要求し、たたかいとっていった。職制の横暴はしだいに影をひそめ、少しずつ、働きやすい職場を求める労働者の切実な要求を認めざるをえなくなった。

そして報印の若者たちはたたかう仲間を知っていった。地域の中でたたかいつづける労働者の支援のために、印刷労働者は若いエネルギーでからだをはって参加していった。擬装倒産とたたかう女性だけの組合・三星電機労組の職場占拠を応援するために、印刷の仲間たちは、毎

晩、午前二時から五時までの不寝番をひきうけた。寒風ふきすさび、冷雨にぬれて、若者たちは同じ、低賃金・無権利に目覚めてたたかいつづける娘たちに力をかした。

そして、昭和四〇年五月には、報知新聞はじまって以来の、四九時間ストで一日、新聞発行を停止させた。この時の要求は、労働者を新たな労働強化と人減らしに追いこむ、新勤務体制反対と賃上げ要求だった。会社は燃えあがる現場労働者のささやかな要求をのまざるをえなかった。

このたたかいは、もう一つの貴重な成果を生んだ。報知新聞労働組合に報知印刷労働組合と報知印刷大阪労働組合、この三つの労働組合がともにたたかう、三単組共闘会議が成立したこと。

報知新聞労働組合員の中には、それまで、根強い、印刷労働者べっ視の考え方があった。この傾向は三単組共闘成立の中で、しだいに少なくなっていたが、現在もなお、一部の報知のエリート社員といわれる取材記者たちの中にあって、脱落者の思想にもなっていた。

「印刷所の職工どもと、わわれれ記者とは違う。奴らのために闘争のまきぞえになるのはごめんだ……」

こううそぶいて、報知大阪・野球分会の奥村記者は脱落していった。

「報知新聞記者も読売にバカにされながらやってるじゃないか。俺たちみんな、ひがみ根性で、弱い者いじめする悲しい習慣をつけられちまってるんだ。新聞も印刷も同じ読売大資本系列会社に働く労働者じゃないか……」

三九年、東京オリンピック前後に大量入社してきた若者たちが、新聞労組青年婦人部の先頭にたって、偏見をうち破り、印刷労組とともにたたかう道に勇敢に歩みだした。四九時間スト

を孤立してたたかわせて申しわけないという気持の中から、四〇年秋、ついに三単組共闘は発足した。

働きやすい職場への発端＝村上事件

気がついて見回すと、低劣な労働条件と働きにくい職場環境は印刷職場だけではなかった。新聞社員自体、賃低金の上、各部バラバラの賃金の仕組みであり、読売出向職制の顔色ばかりうかがう風潮がまかり通っていた。

新聞職場でも、まず整理、校閲、連絡など内勤職場を皮切りに、印刷職場に教えられて、職場民主化のたたかいが進められた。

〝村上事件〟はもっとも代表的なたたかいだった。読売新聞地方部長から転任してきたばっかりの村上編集局長が、直接、ある整理部員を呼びつけ、「部長の命令に従わないならやめてもらう！」といったことから問題は広がった（実際は命令などなかった）。労働者のクビを簡単に切ると宣言した局長の暴言に、編集関係者の怒りは集中した。

「村上なんてひでえ男が報知にいって、同情するよ。あいつは平気で労働者をぶったぎる男さ」という、読売組合員の話は報知新聞労働者を勇気づけた。整理分会は同じ問題の起こっていた連絡分会や校閲分会に呼びかけ、共同して村上局長にぶっつかった。各職場で徹底的に討議して、全員参加の職場集会に村上と各部長たちを呼んだ。

「局長、あんたは労働者をなんと思っているんですか！」

「報知の、職場の仕事の仕方を尊重して下さい」

組合員はつぎつぎ立って、局長を追及し、部長たちは後難を恐れて、局長援護の発言はできなかった。この時の編集職場民主化のために、

職場を基礎に結束した三職場のたたかいは、これ以後各職場に広がり、広告分会などでの差別撤廃のたたかいに発展していった。

また大阪支部では、〝ピンボケ闘争〟と呼ばれるたたかいがあった。カゼで休んでいる写真部員に対して部長が、

「カゼぐらいで休むとは何事だ！　すぐ、出勤しろ！」といったことに対して、組合員の怒りが爆発したのだ。

新聞・印刷をとわず、あらゆる職場で、人間らしい職場づくりのたたかいは広がった。たたかいはつぎつぎと多くの労働者の要求をひきだし、さらに発展していったが、結局この時期のたたかいの性格はあまりにも非人間的であった職場環境と劣悪な労働条件の改善であったといえる。格差是正のたたかいにもかかわらず、前述したように、今なお各職場ごとバラバラの賃金体系があらためられていないことをとってもそのことを物語っているといえる。

こうして、初めて「ホワイトカラー」と「職工」を同じ団結の輪に結びつけていった報知の〝植民地独立、人間復活〟の組合活動は、たとえまだかちとったサイフの中身はわずかでも、同じ職場・地域に働く仲間たちの中に広がっている。

職場では、報知新聞労組の努力によって、事実上臨時労働者組合が一二〇人の臨時・アルバイト労働者を結集して組織された。

ひそかな策謀のマル秘文書

人間らしい職場をもちたいと願うすべての職場・地域の労働者の連帯の輪を広げよう……報知・報知印刷労働者の願いは、ただそのことにつきた。そのために、労働者は資本の狂暴な攻撃にたえる力を身につけなければいけない。警察の弾圧介入とどうたたかうかを学ぶために、

日本国民救援会にも加入した。

まったく、労働組合のイロハも知らなかった若者たちが、こうして一つひとつ素直に学び、行動し、ただひたすら人間らしく、働きやすい職場をつくるため、馬鹿の一つおぼえのように忠実に労働者の団結をたいせつにしていった。

会社はこのことを一番恐れていた。ゼニをとられるよりも、自覚した労働者が自分たちの働きやすい職場をつくる権利に目覚めることをもっとも恐れたのだ。

会社はこの頃から、労働者の素朴な団結を切り崩すために、陰険な策謀をめぐらしはじめていた。昭和四三年秋にはすべての良心的な活動家にアカのレッテルをはり、反組合教育のために使う一〇通のマル秘文書が大阪の職場で組合の手に入った。ひそかに職制組合員に配られていたものの一部であった。この事件は、三単組共闘の徹底的な追及で、あくどい不当労働行為であることを会社にみとめさせ、謝罪文を書かせたことで一応ケリをつけた。

だが事はこれで終わらなかった。会社は、労働者の自覚と団結の前進に手を焼き、ついに、もっとも狂暴な人間を使った、決定的な攻撃を用意するようになった。昭和四四年の新春とともに、報知経営者の労働者攻撃の黒い姿がその全ぼうを見せた。

Ⅳ　岡本アイヒマンのいったこと・やったこと

――岡本体制の正体

1　労働者・労働組合の見方

就任といっしょにきた「赤字」

「ふしぎなご縁で報知印刷所社長の席をけがすことになり、責任の重大さを痛感している。ところで、報知印刷所内の最大の問題は労使関係にあると考える。わたくしは近代経営の労使関係のあり方は、労使が互いに敵視することではなく、企業運営の良きパートナーとして労使双方が善意と良識を持って、互いに企業と従業員の福祉増進にあたるべきだと思う。つまり労使双方の時間、エネルギー、経費をムダに消費する労使間の対立抗争をなくして、この全エネルギーを競争企業との戦いに結集、投入すべきであると確信する」

（報知印刷所社長就任あいさつ――報知新聞社報四四年一月三一日号から）

岡本武雄が報知にきて同印刷所社長になったのは四四年一月一日付け、正月明けの会社の掲示板によって、組合員たちは知った。棚橋前社長は、前にのべた文書事件の責任をとり前年暮れに解任されていた。このあいさつは、一月末の社報（社は別だが、社報は共通）で知らされたもの。

彼の〝社長就任の使命であり責任〟というも

のをもっときこう。

「私は諸君の組合をつぶすために来たのではなく、この会社を倒産の危機から立ち直らせ、立派に社業を再建して、全従業員諸君を、失業の危機から救い、その生活を保証するために来たのです」

（同年四月二一日付『報知印刷所はこれでいいのか』社長名の〝青パンフ〟）

組合員をとなりちらす岡本報知印刷所社長

おっしゃったことはほんとうでしょうか。こういうことをいいながら、彼は実際にはどんなことをしてきたのか――そのまえに一つはっきりしたことがある。それは報知の従業員にとっては、四三年が暮れ、四四年が明けたらとたんに自分たちの会社が「企業倒産の危機」赤字経営に転落していて「失業の危機」に見舞われていたというわけで、たいへんな年を迎えたことである。

「近代経営の労使関係」「良きパートナー」「組合をつぶすために来たのではない」としつようなまでに労組の〝あり方〟を念頭においた就任の弁と合わせて、奇妙な倒産の演出とともに岡本はやってきた。

これはのちに出される〝青パンフ〟（水色の表紙のパンフだった）で『報知印刷所はこれでいいのか全従業員の良識に訴える』という社長名のパンフレットにくわしい岡本流の考えだった。

〝青パンフ〟をみよう（以下引用は同パンフ）

「前社長はいたましくもその責任を負って退陣されたことは諸君もご承知の通りです。しかし問題はそれによって解決されたのでは全くありません。すなわち会社は昨年十月以降五ヵ月間の平均実績によると、毎月千八百万円、今日、一日六十万円ずつ赤字を出しているのです。一時間二万五千円、一秒間四百円にあたる莫大な赤字を刻々出しつづけており、このままでは倒産への道をたどるだけなのです」

だが、一〇月から二月までの五ヵ月間の〝実績〟のうち、彼が社長に就任して二ヵ月、その前が三ヵ月、この去年の三ヵ月の間、会社側が組合に対して〝赤字〟だと説明したことは一度もなかった。

「一秒間四〇〇円の赤字」といいきる岡本社長はどんな〝計算〟のもとに赤字をはじき出したのだろうか。まるで彼がきてからの二ヵ月に急に赤字が出るようになったというようなものである。

春の賃上げ交渉にはいる前に、とにかく突然「赤字」と倒産の危機がやってきた。これが岡本社長の第一にいったこと、やったことであった。組合員はこの〝パートナー〟の説明を信じなければならなかったのか。

組合の〝人民管理・略奪〟が赤字の原因

つづいて岡本社長は〝良きパートナー〟として、その赤字の責任はあげておまえにある、と〝大声〟をあげた。長文一三ページの〝青パンフ〟がゴシック活字と傍点をつけて従業員の良識に訴えている。

「二、組合はこうして会社を支配した」から―

会社が今日最大の危機におちいったのは、一言にして言えば、会社の社業運営の指導権を組合が握り、会社から略奪をほしいままにしたからなの

です」（傍点も原文のまま）。

「四、さながら人民管理による会社運営」から

『……経営権に組合が介入している、などという生やさしい段階ではなく、事実上金融面を除いた経営管理の主導権を組合が握っている。いわば「人民管理による会社運営」というべき姿です。組合の立場からいえば従前の経営者に対する「輝かしい組合運動の大勝利」といえるのかも知れないが、しかしその結果会社はどうなったでしょうか』

略奪をほしいままにした組合が会社を人民管理しているから、会社が赤字になり危機になったとキメツケているのである。

まっとうに働く労働者が、苦しいなかで、一歩一歩きづきあげてきた生活と権利を守るたたかいの成果に対してこういうことがヌケヌケといってのけられるためには、彼のいう、よきパートナー＝労働組合観が前提になくては理解できないことだ。つまり「近代経営の労使関係のあり方」を説くこの人の組合観によると、報印の組合は「今から二十数年前の戦後労働組合発足当時の暴力的な組合活動を、月世界に人類が足を印せんとするこの宇宙時代に……（略）……企業として生き抜く戦いをしているこの時代に、むかしそのまま暴力的方式を適用し、前経営者からムリヤリ腕ずくといってよい状態で強奪した」（「五、企業の支払い能力を無視」から）、「余りにも常識ばなれのした要求であり、瀕死の重病人からハゲ鷹のように骨までしゃぶろうというのでしょうか」（「六、五億四千万円にのぼる春闘要求」から）と労働組合の正当な要求や行動をとらえ、誇大に、ワイ曲して組合を暴力的、人非人にしてしまう。この岡本の労働組合、労働運動観がアカ攻撃の根っ子にすえられ第二組合をつくり、労働者の間に対立をもちこみ、全面ロックアウトというコースにつかっ

ていくのである。それこそ働く者を人と思わず暴力的に人非人扱いしていく姿が岡本労政なのである。

岡本は労働者をどうみたか

「岡本を追い出すことさえできたら給料がこれまでより減っても、労働が少々強化されたとていっこうにかまない。僕が社内にもう一度入るときはあいつがいなくなるときしかない」ロックアウトとたたかっている報知の組合員がこうまで怒る岡本とはいったいどんな人物なのだろうか。

北海道石狩に生まれ、苦労したという。戦後、三〇年には官僚での出世に見切りをつけ、文化放送テレビ準備局、同技術局次長に〝天下り〟。民間では〝電波屋〟の時代に人事面に首を突っこむ天下り人種として振舞い、このときの活躍で三四年に産経新聞社へ。財界から社長に就任した水野氏に乞われて総務局次長としての新聞界入りだった。

会社再建に名を借りた人員整理と労働組合つぶし—御用化に没頭、悪名高い〝一〇〇〇人首切り〟は彼が人事担当、兼労務担当の間になしとげたものだ。組合員だけでなく役職付きや、職制も含めた一〇〇〇人の内には、二名の自殺者が含まれている。不当配転、出てゆけよがしの配置・職種転換、役職降下とこれみよがしの特進を、たんに人べらしと自分の功績だけのために冷酷非情に行なった。

第二次大戦中、ナチのファッショ下。ユダヤ人六〇〇万人が惨殺されたときのアウシュビッツ強制収容所長アイヒマンのむごさえ連想されるところから、〝サンケイのアイヒマン〟といわれたゆえんである。新聞界にこの〝異名〟の知れわたった彼は、四三年秋、彼を重役にとりたてた水野会長らの総退陣によって政治生命を

断たれたと思われたが、わずか三ヵ月後に読売人事によって〝競争企業〟の報知印刷所社長に転身した。「ふしぎなご縁で……競争企業との戦いに」（就任あいさつ）やってきたというのだ。

就任以来一年五ヵ月の間に岡本がやったことは常識では考えられないことばかり。社長就任と同時に、それまで会社と組合が取り決めていた数々の職場慣行を「前の経営者が約束したことは一切白紙に戻す。社長がかわったのだから当然」とルール無視し一方的に職場交渉の道を断った。この第一弾は、岡本を知る者にとっては予想通りの出来事だった。だが、報知の何人かの組合員には、ただただ驚きと釈然としない感情だけが残った。だがその後、役職、裏金と酒食そしてオドカシを要所におりこませて報知印刷労組のきりくずしを画策、第二組合を強引につくりあげた岡本には、会社側の管理職者にすら「新聞経営に名をかりた組合つぶし」の意図をくみとらせるものがあった。

なかでも、四四年四月、例の〝青パンフ〟直前、輪転職場の一組合員が輪転機に両手をはさまれて重傷を負った事件でみせた岡本の〝非人間性〟はアイヒマンの面目を社内ばかりか販売店主にまで知らしめた。

その組合員橋本君（二一歳）の左手は輪転機の奥深くに食いこみ、グシャグシャにつぶれた。「二七針縫ったところまでは数えていたが、あとは夢中で加療したので、医師としてはずかしいことだが、何針縫ったのかおぼえていない。完治するかどうかはなんともいえない。とにかく医者を驚かせるに十分な重傷だ」橋本君は一ヵ月入院した。そして当然のことながら従来どおり入院加療費のタテカエを会社に請求した。勤務時間中の負傷、つまり公傷だからだ。だが会社は「タテカエることはできない」といった。理由は現認書（事故現場で事故を目撃した

者の〝事故目撃証明書〟）に「……疲労のために」という字句があったからだ。事故は最終版の印刷中、午前四時半頃に起こった。職場ではそれまで増員を会社側に要求していた、といえば会社側の拒否理由はわかるだろう。責任回避の意図は明らかだった。組合の抗議行動は高まった。新聞販売店主らが事の真相を知り、岡本に進言しなかったら、この問題の解決は遅れたかもしれない。

この事件はこうして表面的には解決をみた。だが、真の解決はしていない。組合員はいう。

「同じ人間同士の交渉には、どこかに心の触れあいがあっていいものではなかろうか。まして新聞作りという同じ目的があるんじゃないか。だが、岡本のやり方には人間味がまったくない。人情のひとかけらもない」

合理化下の職場でケガをしても会社は知らぬという。――こんなことを許したら、労働者は生きていけない。

2　実践――分裂・二組づくり

のびた岡本のツメ

夏までかかった春闘のあと、岡本社長は攻撃のほこ先を主として報印労組に集中させてきた。夏の一時金協定書の「前期を下回らない」という申し合わせを破った。嘱託のおじさんたちには前期の半額とか、組合員も二万円から一万円も下がった仲間たちが三分の一以上にもなっていた。それは組合活動家を意識した差別であり、いやがらせ行為だった。不当労働行為としてみんな抗議に立ち上がった（都労委提訴中）。

この時おかしなことが起こった。採字職場で約二万円下げられたT君が部長に抗議してくるというと同じ職場で組合の指導者格であった近

藤仁さん（委員長を五期つとめ、新聞労連東京地連の副委員長だった）がこれをとめたのだ。

「やめた方がいい」といった仁さんは〝二万円以上アップされている〟こんなウワサが職場に広がっていた。ちょうどそれは春闘でのびのびになっていた定期大会の直前で、次期役員に誰を選ぶかが職場の中の問題になっている時であった。

これは後に判明するが大変な事態に進んでいたのだった。つまり岡本社長は組合丸がかえを狙って彼の〝努力〟をしていたのだ。近藤仁の組合での実績に目をつけ、私生活の乱れをたくみに利用し、かかえ込み工作にのりだしていたのだった。

役員の人選で近藤仁は田中伸一（前委員長）を強力に推せんしたが、田中は職場の全員から反対され、あわてた近藤は自ら委員長に名のりをあげた。職場の意見は近藤候補について二つに割れた。彼の実績をたたえる者と言動がおかしい危険だ、という者とがでた。そして山口委員長（現）を推せんする者がでた。

近藤候補と山口候補、二人の人格、考え方と方針をめぐって討論がつづいた。近藤は「みんな団結して生活向上、明るい職場をめざそう」と表むきはいうが、プライベートな意見で同じ職場の組合員には、まるきり違うことをいっていた。「これからは厳しい情勢になる。三単組共闘なんかやっている時ではない、岡本を利用してうまくやっていくべきだ。〝青パンフ〟の提訴（六九年四月二一日都労委へ不当労働行為として提訴中で現在審理中）なんかとりさげるべきだ」というのであった。これを聞いた組合員は首をかしげた。「仁さんが……まさか」だがオレにはこういっていた。あんなことをいっていた……と、いう声が編集からも、輪転からもでてきた。大変なことである。次期をゆだねる委員長候補が

岡本社長のいい分と似たことをいっているとは——このため定期大会は一週間延期された。

ノブさんの決意

だが組合大会前、何人かの仲間たちが元気をなくしていった。その中にいつも元気がいい延原君がいた。〝馬〟というニックネームでみんなに親しまれていたそのノブさんが、職場集会でまったく首をたれて発言しなくなっていた。みんな心配した。九月のある日、ノブさんはさらに青い顔をして分会で発言を求めた。みんな「なにをいうのかナ」とばかり注目した。もちろん近藤仁もいた。近藤仁の唇は青くふるえていた。顔色も死人のようだ。「何かある」何人かの仲間は感じとった。ノブさんはいいだした——。

「みんなきいてくれ、オレがあまり元気がないのでみんなに心配をかけたけど、もう大丈夫だ。オレ迷っていたんだ。仁さんはオレの媒酌人だし二人とも親しいし、苦しかったんだ。実は……」と、語った内容は会社と近藤仁による組合破壊の工作だった。

……山口君が委員長になれば徹底的に攻撃するという会社、すでに首切りリストも一二人ほどできあがっているとか、役職降下も決まっている。そしてノブさんに〝班長〟になれとすすめたことや、近藤が〝オレの力でさせてやる〟とまでいったという。また、帰りは今まで乗ったことのない日交のハイヤーで会社のチケットで送ってもらった……。

ノブさんは料理屋「岡半」(浅草の割烹料理屋)によび出されて会社、近藤などによって受けた懐柔工作のすべてをみんなに話していった。

「オレも、借金で家を買ったばかりだし、両親をひきとらなければならないし、もうすぐ子供が二人になるし、いろいろ考え……クビにな

ったら……本当にどうしていいか分かんなくなったんだ――」ノブさんは涙を浮べて話した。みんなも泣いていた。近藤とその一派は真っ青な顔でうつむくばかりだった。ノブさんはつづけた。

「オレは絶対にみんなを裏切ることができない、女房とも一晩中話し合った。女房は首になったら自分はいなかに帰って子供を生むといってくれた。ダメだ、仁さんに委員長をやらせたら……。オレはみんなと一緒に岡本とたたかいたい――」

ノブさんは泣きながら訴えた。静かだった職場は、ことの重大さを知って憤激した。

「オレたちみんなを売ろうというのか、出世が……、金がほしいならなんで一人でいかないんだ。汚ネエーことするな」みんな怒って近藤に抗議が集中した。いつの間にか休憩室には他職場の仲間もきていた。

組合大会の日、ノブさんは奥さんと子供をつれて参加した。そして議長に選ばれていたノブさんは、自分の経験したことを全員の前で明らかにした。「自分は議長などやる資格がないが、このままやらせてもらっていいんだろうか……」「いいぞ！　やってくれ！」みんな大声でノブさんを激励した。こうして大会は山口新委員長を選び、組合は新たな態勢をととのえた。

組合破壊の手のうちを知られた会社があわてたことはいうまでもない。大会後、近藤仁は四週間も会社にでてくることができなかった。

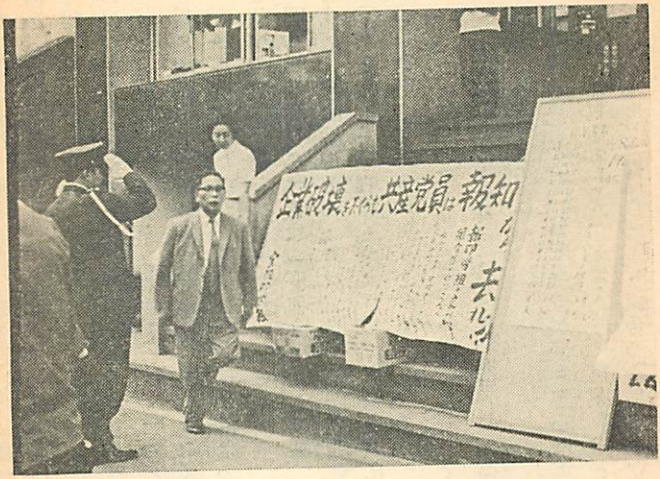
岡半事件は、岡本が労働者や家族までをふくめて汚い手でひきさき、対立・分裂させていくことによって経営を思うままにしようとしていることを示したいい例だ。岡本の経営の仕方はその口先のいい分とは全く無関係に人間のみにくい面をひき出し、働く者をダラクさせていく方法だ。だがまっとうな労働者はこの中で鍛え

られていく。「ノブ」さんに象徴される報知労働者の闘う姿こそが真の報知を作るものであることは誰の目にも明らかだ。事実ノブさんの行動は完全に会社の手先となった第二組合幹部以外はくずれないという支えとなった。

〝アカ攻撃〟だけしか道がなくなった

会社からボーナスぬきにされたまま正月を迎えた報知印刷の職場には、元旦付けで、再び「役職降下」の攻撃が加えられ（都労委提訴中）こういう職制しめあげの中で〝岡本組合〟が、ボーナスとひきかえに〝お受けします〟といった受注印刷―外注物がぞくぞくやってきた。輪転職場では、組合脱退者が少なく、これに追いつけない。岡本は、まだ協定していない組合員をも動員する命令を出した。組合員一人ひとりに名ざしで〝業務命令〟を出し、組合の抗議を無視して強行、組合は部分スト、指名ストで抗議した。「ボーナスも出さないで自分の命令だけきけというのか。あまりにひどい」――抗議に対する岡本の答えは輪転六名、指令責任者の山口委員長ら組合四役、計一〇名の「業務命令違反」出勤停止処分であった（都労委提訴中）。

考えてみてほしい。報知の組合には専従の組合役員はいない。みな仕事を受け持ち、病気で休んだり仲間が組合の用事でいないときは他の仲間がそれだけ忙しい。そこへ「出勤停止処分」ということは、①会社は受注増でもうける②組合員に処分の見せしめ③会社は処分者に給料を払わない④職場の仲間は仕事をそれだけかぶって忙しい（それだけ詰めた仕事をしなければならない）ということだ。新聞印刷は早く、きめられた時間までに仕上げねばならぬうえ、受注されたものも、納期がある。つまり会社は「出勤停止」によって絶対にソンをしない、もし、ソンをするときは、印刷を止めてしまって、納



赤攻撃の掲示板の前を行く菅尾報知新聞社長

期を守れず、注文者が欠損を出して会社に後始末をさせたときである。岡本は一石三鳥、四鳥のトクをする手口を選んできたのである。

岡本は孤立のミゾを深めていった。二月一七日には〝指名ロックアウト〟＝組合員個人を名ざしで閉め出す暴挙にでた。とかく判断のおくれがちな裁判所（東京地裁）も、さっそく（四月一四日）この暴挙に仮処分を決め、ロックアウト中の賃金を支払えと命じた。岡本のあくどいやり口に怒った組合の都労委、地裁への提訴のうち「勧告」措置、仮処分決定など結果の出た五件（五月末まで）はすでに組合側の訴えが認められた。とうとう岡本は組合員だけでなく労働委、裁判所さえ〝アカ〟だと口走るようになった。

岡本が社内だけでなく、こうしたやりくちで世間を渡り歩いていることが明らかにされた例をひとつあげよう。七〇年春闘のはじまったあ

る日、彼はまた〝重大放送〟を予告した。また何を言いだすのだろうか。録音テープを用意した組合員たちの耳にスピーカーから流れてきたのは、読売新聞長倉労務担当重役宅へ「きょうやっと（組合への）処分を出しましたよ」などと報告電話中の岡本の声であった。マイクのスイッチを間違えたのか、とにかくテープはさっそく都労委へ証拠として出された。

岡本式世渡りの代表は「平和協定」〝提案〟方式だ。彼は就任後の〝青パンフ〟で経営改善の提案と称し一〇項目を掲げたが、その末尾にゴシック活字でチョロリとこう書いた。

〝（注）前各項に抵触する従来の協定、確認、了解事項および労使慣行はいっさい廃棄し、その効力を失うものとす〟

これは（注）といいながら彼が最も熱心に実行したい眼目をうたったのであり〝提案〟はどれから先に押しつければより組合つぶしに役立つかという段取りであった。既成事実を公認させるためのクーデター宣言のようなものである。労使のルールをとっぱらう立場をとり、押しつけつつ「平和」協定を口にする。これは、相手をなぐりとばしながら〝なぐられ方をきめてやろう、だからお前もいうことをきけ〟という「屈服」強制に等しい。――「平和」の名の下で。

報知（新聞）には自ら理想とする「平和」協定を条件つけず、もっぱら報知印刷に集中した分断攻撃も奏功せず、都労委、地裁敗訴もつづく七〇年春闘のなかで、とうとう岡本は周知の狂暴な手段に出た。なぜなら〝彼らはほとんどアカだから〟――岡本がいう唯一の〝正当化理由〟である。

赤字からアカまで――岡本の言動をつぶさに体験してI記者はこういう。「スポーツマンにとってアンフェアであることはその世界で失

格を意味する。岡本のやり方はそのアンフェアどころではない。岡本労政は人間のみにくさを引き出し、人間関係を破壊するところに信念と価値を求めているのだとしか考えられない」けれども、ロックアウト後の組合員たちは、大多数の仲間と、行く先々での人たちの良心にふれることができたのだ、岡本労政に感謝しなければならないのかもしれない。

社長室によびつけ脱退工作

ノブさんが「岡半」事件で明るみに出した会社側の〝予告編〟は実行に移された。まず真面目な組合員職制だけをねらって何の予告もなく即日役職降下した。係長、係長代理、班長がヒラにもどされた（都労委提訴中）。

ついで〝怪文書〟が横行した。トイレや寝室にばらまかれた文書の内容は、アカ攻撃で塗りつぶされていた。要するに〝委員長は共産党〟など、公党の名をあげるものも、あげないものも、組合員を疑心暗鬼におとし入れようとする奇怪な言辞でぬりつぶされた、出どころがまったく不明の文書がバラまかれた。

四四年一一月二〇日、板べいで打ちつけられた報知新聞社玄関前は、制服、制帽のガードマンが二十数名立ち並び、異様な光景が展開された。外には公安刑事がうろつき、作業衣の職制たちが、やはり作業衣、戦闘帽姿の岡本社長を先頭に立ち並んだ。第二組合結成後の〝入場式〟だった。近藤仁を先頭に奈須野、足利、青木、三上らの顔がみえる。かつて近藤は青木、三上らとは犬猿の仲だったが、今は一緒に行進してきた。――深夜近藤の家にでかけた本田（のちに第二組合委員長）、椎野らの〝密談〟証拠写真が組合員によって暴露されて二日後であった。

第二組合〝歓迎〟の陣頭指揮をとり、社長自

らが〝岡本組合〟の良きパートナーであると誇示した狂態ではある。このとき岡本は他の〝パートナー〟に対してはどういう態度をとったか。組合は秋闘をつづけていた。要求の中に「屋上で簡単なスポーツのできるようなものを…」というのがあった。これに対して岡本社長はいう。「スポーツがやりたきゃ家でやれ。会社は体育学校ではない。麻雀、パチンコはいらないのか」公式の団交席上での発言だ。スポーツ紙の責任者のスポーツ観もさることながら、組合が抗議すると「ふざけんなコノヤロー」と返ってくる。このままの言葉である。

ツメにひっかかった者がたとえ二六名であったとしても、〝岡本組合〟がデッチあげられると、これを手がかりに「私はやりません」という組合つぶしの手口はエスカレートした。三単組のうち報知印刷労組だけに対して、年末のボーナス回答に四項目の〝逆提案〟と「平和協定」を条件づけ、組合がこれを認めないならボーナスを出さない。いわば〝兵糧攻め〟の卑劣な手段をとった。〝岡本組合〟はこの岡本提案をもちろん受諾。

すでに大晦日もせまった一二月二九日、突貫工事で社内にスピーカーが設置された。アカ攻撃を満載した「社報号外」もあらかじめ数回にわたって配られていた。スピーカーから岡本の声が全職場に流れた。「東京、大阪で九三人の希望退職をつのる。いなければ人員整理――」ボーナスを出さないどころかクビを切る――。深刻におどしたうえで、彼はこの機に〝岡本組合〟を一人でもふやそうと動きまわった。職制の組合員は直接、社長室に呼ばれ、「会社に協力するのか、組合にのこるのか、考えろ」といわれる。机の上にはテープレコーダー…。

社長自らの脱退工作（都労委提訴中）は大晦日までつづき、およそ八〇名の仲間が組合をや

めていった。親、兄弟もひきさかれ、泣き泣き離れていく仲間もいた。借金をかかえている者、生活苦、みんな不安だったのだ。その後、結局職制を含めて三十数名は会社そのものを離れていった。〝失業の危機〟を救いにきたといった岡本の会社に希望を失って―。

ところで岡本がボーナスにつけてきた〝四条件〟とはどんなものだろうか。

㈠外注物を無条件、即時、全面実施㈡新勤務体制の実施(平均六、〇〇〇円の減収となる)㈢自由配転㈣新勤務体制にともなう三六協定(残業協定)

〝岡本組合〟へつれ去られた人たちは〝協定〟通り新勤務体制なるものに従って仕事をしなければならず、社外からの受注印刷物(仕事の増大)で仕事はふえたのに、減収になった。ひどい人は二万円前後減った。だが不満はいえない。「平和協定」がその口をふさいでいた。

岡本のいう〝よきパートナー〟とは、労働組合のキバを抜いて、会社のいいなりになる従業員の集団に組合がなること、勝手気ままな業務命令で、働く時間も仕事も外注もやらされるようになることだ。そのためには、人間関係をひきさき、家族をふくめて悲劇をまき起こしてはばからない。良心の歴史をきざもうと思う働く者たちの人間らしい、労働者らしい結びつきを尊重するのではなくて、それをこわし、みにくい争いと、仕事をする気をなくすようなやり方でしか岡本労政やその経営は成立しないのだ。

ちょうどアイヒマンが人間を人間としてあつかうのではなく消耗し、灰にすることをもって自分の仕事にしたことに酷似しているやり方だといえよう。また岡本労政をやっていくうえでそのささえとなっているものは〝アカ攻撃〟だけである。これもまたアイヒマンに酷似しているといえないだろうか。

V　広がるたたかい

——全国各地から「これはオレタチのたたかい」

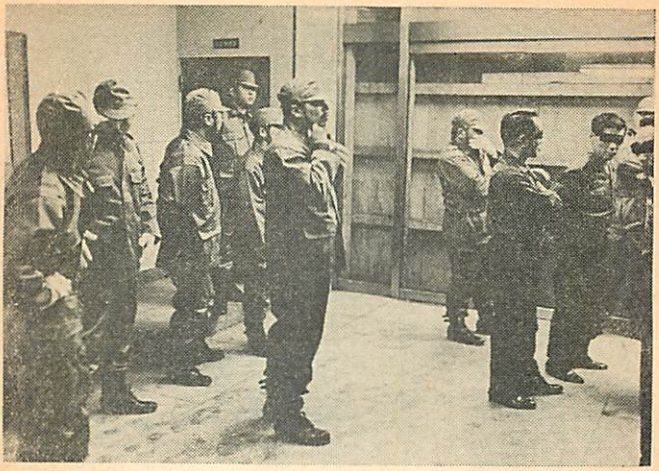
1　新聞・マスコミの仲間たちの熱いスクラム

回答は〝ゼロ〟でも暴力団には一日一万円

「会社にお金がないのなら、少しぐらいの賃上げはガマンしなくては」と考えている人でも、報知の仲間が就労闘争（仕事をさせろと要求する行動）のとき、会社の玄関で叫ぶ声をきけば、首をかしげるかもしれない。

——去年の冬のボーナスを出せ！
——暴力団は職場から出ていけ！
——春闘要求に答えろ！
——ロックアウトをとき仕事をさせろ！

賃金を上げ、働きよい職場にしようとする労働者たちに経営者が「資金がない。このままでは会社はつぶれてしまう」といって争議になっ



暴力団に占領され，板べいを打ちつけられた玄関

ているのではない。

組合の一万五〇〇〇円の賃上げ要求に「ゼロ」と口をとざす報知経営者が、暴力集団に日当一人一万円、スキャップ（スト破りの臨時雇など）に輪転機の仕事では八〇〇〇円から一万円、活版の仕事で五〇〇〇円、発送作業に三〇〇〇円の日給を払い、組合つぶしのためにはばく大な争議資金を使っている。この事実一つをとってみても、報知経営者の〝異常〟さに気づかれよう。

しかし、新聞やマスコミ産業に働く者にたいして争議のためには金に糸目をつけないやり口。このような経営者の居直った攻撃が行なわれたことは、数えきれないほどある。

一例をあげれば、西日本新聞の場合、一五〇人ほどのロックアウトをするために半年で一億数千万円を費やしたという。報知の場合も日に数百万円を下るまい。

「私は読売の全権委任を受けてきた」と称し、開口一番、「一カ月で組合をつぶしてみせる」といった岡本報印社長の〝豪語〟のなかに、なにほどかの真実味があるならば、それは大手町の新社屋建設に三〇〇億をつぎこみ、一大設備設資に乗り出した読売資本のケタはずれの「金力」の自信ではなかったろうか。

だが三〇〇億といい、暴力団一人に払う日当一万円といい、結局、その資金を返して、もうけを生む仕事をするのは、とぼしい賃金で暮らす労働者であろう。

『白い風の道』などの小説を連載してきた間柄の作家村上元三氏は、報知争議について「イデオロギーの点ではぼくにはぼくなりのものがあるが、純粋に考えたら大部分の組合員がロックアウトされて会社側は月給も払わないなどということは常識では考えられないことだ。それではあまりにも組合員が気の毒だと思う。ともかく紛争を一日も早く解決するためお互いに歩みよってほしい」という。

三進興産社長で日本ラグビー協会国際委員長の金野滋氏は、経営者の立場から「いまどきそんな経営者がいるのかね。もっと世界の経営者を〝取材〟する必要があるね」と驚き、ある都心の大劇場の総支配人も「現在の私の立場は経営者側に属しますが、いまは暴力団まで導入して争議を解決しようという時代ではないと思います」と批判した。

「岡本労政」へ二〇労組が連帯スト権

三〇〇億の新規設備投資をするぐらいの資本力ならば、一％使っても三億、雀の涙、蚊の涙——という資本の〝論理〟もあろう。しかし、「金力」の係数にも限界がある。報知の労働者を包む輪のひろがりが、それをはっきりと示している。なによりも人間として、そして労働者

として、守るべきことがある。当初労働組合を「企業破壊者」ときめつけた岡本社長が、自ら企業の成り立ちえない無暴な暴力団導入＝問答無用、全面ロックアウト＝紙面低下のやり口を選んで、それこそ「企業破壊者」の道を歩みだしたとき、七割の組合員は団結して、岡本の道を拒絶したのだ。

「一生かかっても、ぼくがもう一度社内に入るときは岡本社長も暴力団もいないようにがんばる」（整理部E）

常識で考えられないやり口を経営者側が選ぶ素地がなかったとはいえない。岡本以前、会社の成り立ち自体が、同じ読売系列（それは、どの大新聞にもある）とはいえ、報知（新聞）、報知印刷（工場）、大阪報知印刷（工場）と同一紙を別会社に分割してつくるようにされ、「植民地」支配、本国からの天下り人事といった前時代的経営が行なわれたことである。岡本のようなタレント「労務屋」を他社からもってきて、〝全権〟をあずけ、社長（報知印刷）にすえるということが、そもそも異常、非常識であったし、岡本は案の定、その上塗りをやっているにすぎないという見方もできる。いずれにせよ、こんな〝経営〟が憶面もなく行なわれるのも「植民地ならでは」との前時代的発想が感じられる。

同じ系列のＮＴＶ（日本テレビ＝最近、前読売副社長小林与三次氏が社長に就任）の労組、読売テレビ労組がいち早く、報知の組合弾圧に対して連帯スト権（いつでも支援ストに入る態勢）を立てたのは偶然ではない。きょうの仲間への攻撃、あすはわが身だ。いまでは12チャンネル科学技術館、日経印刷はじめ、新聞労連傘下の日本海、宮崎日日、福井、新潟、東京、山陽、共同通信、茨城、北日本、新聞協会、内外、夕刊フクニチ、新九州、アジア通信、ジャパンプレ

ス、南日本の各新聞労組で、報知支援の連帯スト権が立てられている（五月三一日現在）。

報知の労働者は、各組合で連帯スト権が立つたびに、「ありがとう」のビラを貼り出し、交歓集会を開いてきた。

そして、同じ新聞産業に働く仲間のなかで、報知の闘争に力を寄せようという意思は、全国で日一日と大きく広がっている。読売労組は、すでにロックアウト前までに東西あわせて五〇余万円の自主カンパを送った。これまでの自主カンパの最高額である。五月初め、会社側が不可能だろうと宣伝していた労連の一人五〇〇円カンパが緊急中闘会議できまった。その決定の一番乗りは道新労組、五月一五日、九〇万円の支援カンパが寄せられた。新聞協会労組では第一次の一人五〇〇円カンパに続き、こんどは一人一〇〇〇円カンパを自発的によせ、これらにつづいて労連傘下各労組で一人五〇〇円カンパ運動が進められている。

とぼしい賃金から――カンパの広がりには、岡本らが湯水のように流す〝日当〟などとはまったくちがう重みと力がこめられている。

2　次々にとどく〝心の弾丸〟

カアちゃんのビラまき

岡本の強硬な攻撃がつづくにつれて、組合員の団結は高まる一方だ。「オレたちは一人ではないんだ」皆んなそう思っている。そういわせる背後には多くの仲間たちがあり、家族のささえがあった。五月一九日社会文化会館は家族でうまった。組合が主催した大家族集会の日だった。ある奥さんは五カ月の赤ん坊をかかえ、おじいさんも、おやじさんもいた。「近所の人だ」という人までやってきた。子どもたちがはし

ゃぎ回っている。この日は、岡本社長のきちがいじみた攻撃と、全面ロックまでの経過をくわしく報告し、家族の理解を求めた。そして〝報知横車劇団〟と称している報知報印の仲間による〝七〇〇分一ノブさんの場合〟（組合員七〇〇人の内の一人ノブさんがどうたたかったか）の寸劇が上演された。ダイコン劇ではあったが、ノブさんの人間像に感動した家族の人たちはそっと目がしらをふいた。「私、あまり知らなかったけど報知の人たち、団結っていうの意外に強いのね、ビックリしたわ、これなら大丈夫よ」と休憩時間に話し合っている奥さんたち。

ある組合員の奥さんは「主人がいつも帰ってきて〝つかれた、つかれた〟っていうんです。なんでそんなに疲れるのかわからなかったんです。それが組合の仕事で朝からビラまきをやったり、会議がつづいたりしているからだとわかったんです。そして私にもできる事があるんじゃないかと思い……」こうしてこの奥さんは赤ん坊をおぶい駅でビラまき、商店街、バス停などに歩き回った。職場では「うちの女房が……」と報告もされた。他の組合員の奥さんもこれに刺激されていった。生タマゴをダンボール一箱につめ京橋の連絡所に差し入れにきた奥さん。毎月二〇〇〇円を必ず送ってくれる組合員のお母さん。何か集会、裁判があれば必ず会社を休んでまで参加する父親、家族からの激励の手紙も多い。その一つをここに紹介しよう。

とりかえない「台所」と「良心」

ロックアウト以来、一枚、二枚と家に持ち帰られたパンフレットがいつの間にかわが家の机上を占領していました。いままでこの現状を思いやることもなく主人を会社に送り出していた世間知らずの私にも、ある日憤然として立ち帰った主人を前に、この闘争の深刻さを知らされるハメになり

ました。

いまここで、この闘争からのがれても、労働者の〝しあわせ〟はないでしょう。体制側についても第二、第三組合をつくっても、しょせん労働者は労働者でしかありえず、たとえどんな形をとってみたところで、資本家の搾取からのがれることはできないのです。この資本家と労働者の宿命的な対決に勝ち残ってゆくには、あくまで労働者としての当然の権利を確保する以外道はありません。この単純明快な原理がわからないで脱落して行く人たちが、いまだにあとを断たないというところに報知争議の問題があるような気がします。

私が申すまでもなく、労働者が資本家に勝つ手だては、団結以外にないという鉄則も〝新聞を愛するがゆえ〟などという詭弁のために、仲間を裏切ることがあれば、そこで会社にはいったところで、やはり裏切り者としての待遇しか受けないはずです。

会社側も〝組合つぶし〟の成果があがるまで、捨て身の長期戦をいどんでくるでしょう。してみると、わが家の台所も日ごとにきびしさを増してきそうです。しかし、だからといっていままでおし通してきた一家の良心とは、とうてい引きかえることはできません。聞くところによると、カンパ対策もできたそうですが、それは正当な労働に対する賃金ではありません。それを甘んじて受けなければならない現状を思うとき団結によってのみ、そこから一刻も早くぬけ出る努力をすべきでしょう。

もしおこたる人があるとすれば、それは労働者全体の〝やっかい者〟として、永久にその汚名はぬぐい去ることはできないと思います。その戦いのために最悪の事態をしいられることになったところで、まだ良心を守るだけの手段は残されているはずですし、勝利のがい歌は自分の手で持ち帰るところに意義があるのではないでしょうか。

（文化部A記者夫人）

この他、読者をはじめ報知争議の事態にふれ

た人たちの〝心の弾丸〟が、連日のように報知の仲間に届けられている。――

「新聞社が監視労働の状態で仕事になるはずはない、そんなことがあるのだろうか」という、さきにあげた女子高校生の手紙――。相撲記者の間に親しまれているYさんが国技館の記者クラブでそっと「たいへんでしょう。わずかですが用だててください」とポケットへ一〇〇〇円を……。タクシーの運転手さんにはげまされ、カンパまでくれた、日本橋三越前でのビラくばりでいっしょに手伝ってくれた若いサラリーマン……。『闘う報知』（新聞日報）には組合員の感激の声といっしょにこんなエピソードが連日ガリ版で報じられている。

ある組合員が喫茶店で友人に報知のたたかいを話していたら、それを耳にはさんだサラリーマン風の人が、新聞の切れはしにはげましのことばを書いて、帰りがけにそっと落としていってくれた。「七〇年代の労働者（組合）にとって大切なときです。がんばってください」とあった。

大阪報印の仲間は一三〇個のユデ卵を受けとった。これは都島団地の主婦連が報知のビラを読んで「こんなことが実際にあるのか」と問い合わせ、事情を知ってさっそくカンパし、一個一個に激励のことばを書き込んでくれたのだった。

〝ユデ卵〟が象徴する「敵の中の味方」

ユデ卵といえば、東京でもこんな差し入れがあった。

五月一〇日夜の報知本社内（東京）。「第二組合員」がロックをまぬがれている唯一の仲間たち、臨労組連絡分会の組合員のそばにやってきて紙包みを差し出してそのまま行ってしまった。「裏切り者がなにをするんだ！」――カー

ッとしたが、その紙包みをあけてビックリぎょう天。中味はユデ卵二個。その卵にマジックペンでこう書いてあった。〝職制がにくい〟〝人間やめて機械になって、月賦に追われて、よたよた歩き。労働者の皆さん、団結してたたかい抜こう〟。卵を包んだ紙をあらめて見直して二度ビックリ。走り書きだが、「報印労組ガンバレ」「岡本は大きらい」とある。

報印で「二組」に走った人、新聞の方で脱退していった人。この中には、人間性無視の岡本労政に憎しみをもっている人がいることがはっきりわかる。自分が進まざるをえなかった道、それを憎んで、悔いて、板でとざされた玄関をはいっていく（五月一三日、報知労組日報『闘う報知』から）。

たたかいの中で仲間を去り、強引に会社の仕事に連れ去られた人や、スキャップ（スト破り要員）に雇われた人からも〝支援〟があるというと、奇妙なことだろうか。だがスキャップに雇われた人の中にも、交替でピケットに立つ組合員がきいてみると、真面目に考えている人たちがいた。

速記学校にまで在学中らしい速記スキャップの二人の女性の話。「先生が読売の仕事をしているので紹介されてきた。報知の闘争のことも聞いていた。いやならこなくてもいいといわれた。先生は実社会での練習にも役立つというので、つい仕事優先で来た。悪いという気もしています。一〇日間ぐらいの約束で、それからあとのことは私たちで判断します」

昨年七月退社していたが速記のスキャップに雇われたSさんから組合に電話。「きょう、御徒町で報知闘争のビラを受けとった。こんな状態だとは思わなかった。きょうからは報知には行かないです。いままで働いた三日分のお金も、そんなきたないカネなら受けとるわけには

いかないです。組合へカンパしてもよい」

真のガードマン出現——と労組日報の片すみに報じられた話。ロックアウトから二週間め、大阪報知の正規のガードマンが二人やめた。「良心を持った人間ならとてもつとめられない」とのこと。「報知の組合員は紳士的だ。毎日の行動を見ていると、それがよくわかる。それを敵対視することはとうていできない」さいごには「がんばってください。カンパしますよ」とまでいってくれた。

3　歴史が教えた〝七〇年代の展望〟

〝まさか〟の恐しさを知ろう

「世論をリードする新聞社で行なわれている〝人間無規〟の実情は将来の展望もない暗い世界です。負けてはいけません」と司葉子（女優）さんはいう。

〝報知のたたかい〟は日に日に、より多くの読者の目にふれ、広い支持と激励がよせられつつある。これまでみてきたように、報知の争議では、もっとも自由で民主的であるべき新聞社の中に、前科のあるスト破り専門の右翼暴力団を公然と雇い入れ、常駐させ、七割もの従業員を〝アカ〟〝共産党の組合〟ときめつけてしめ出すという事態の狂暴さ、異常さが目立っている。「こんなことがほんとうに今日あるのか」と驚く人、「こんなことがまかり通るはずがない」と耳を疑う人が大部分だ。だが、そういう〝常識〟がまさに実際に否定されつつあるのが、今日の報知であるし、そういう〝まさか〟が現実なのだということを、あらためて考えてみる必要がある。

考えてみなければならないことの一つは、この〝まさか〟というほど狂暴な組合弾圧はたん

なる一スポーツ紙の争議というだけでなく、現代民主主義を否定する勢力のしつような「試み」ではないか、という側面である。

一九六〇年代、新安保条約改定前後の時期から、新聞・マスコミへの反動的な干渉が強まり、労働組合に対しても数多くの弾圧攻撃が加えられてきたことは周知のとおりである。その様相が狂暴であった例としては、一九六五年、ベトナム戦争への米軍の介入がエスカレートし世論の反発が起ころうとした時期の東京新聞(機動隊導入・ロックアウト、首切り)、福井新聞・放送(暴力団導入・組合つぶし)はじめ、大映、RKB毎日……など一連の争議が記憶に新しい。ここでくわしくはふれないが、とにかくこれらの弾圧に対して、マスコミ労働者は仲間を守ってたたかいをつづけ、攻撃をはね返してきた。昨年—一九六九年には東京新聞労組は四役の解雇無効の地裁判決をかちとった。このなかで、報知印刷社長岡本氏の〝前歴〟であったサンケイ新聞での、彼が直接責任者(総務局次長)として行なった首切り・配転事件の裁判もまた労働者側の勝訴を得た。つまり一〇〇〇人首切りの岡本式労働者支配であった〝残酷〟合理化は不法、不当のやり口で行なわれたことが明白になった。そればかりか、経営〝再建〟のために行なわれたはずの反労働者政策の結果は、七〇億円にのぼるといわれる負債→水野会長辞任となってあらわれた。

こうしてすでに、民主主義が健在ならば成功するはずがなく、現代では経営者としても破産した手口を、大新聞の経営者(こんどは読売資本)がなぜ、しつように採用するのであろうか。その背景に大新聞の過当競争と集中化があり(三〇〇億の新社屋建設、六月二日からの二四ページ新聞発行)、〝七〇年代〟の新聞産業の「再編成・合理化」のしわよせを労働者の肩に転嫁

しようとする切迫した〝資本の要請〟があることはたしかだ。しかし同じ労務政策でも、労組とのルールを守り、話し合い、解決をはかる道もあるはずだ。結局、傍系・子会社といった「植民地」ならば、世論の反発も少なかろうとの、この社会の〝おくれ〟をあてこんだ〝資本の論理〟の最も反動的な部面がむき出されてきた。労務政策の、もっとも野蛮な道、無理が通れば道理が引っ込むとのファッショ的試行が、報知系三単組労働者を襲ったのではないか。

民主主義は殺されない

「平和（協定）」を口にしながら全面的な不法と暴力によって労働者の完全屈服を狙うこの式の攻撃との対決は、報知の労働者にとっては「人権闘争」の性格をもち「人間を守るか、強権によるドレイの道を選ぶか」を問われているたたかいであるとともに、スポーツ紙読者をはじめ国民にとっては、真実の新聞、民主主義の健在を問われているたたかいである。

七〇〇人の仲間の仕事と生活が奪われていることとともに、新聞としてのギリギリの品位さえ問われ、民主主義を問われているという事態の側面についても、主として新聞労働者および〝新聞人〟とよばれる経営者陣の責任は大きい。冷静にふりかえってみてほしい。これまでも新聞企業における経営者の交代やなにがしかの〝資金〟をもっての乗りこみ、あるいは企業の系列化といったことはしばしばあった。しかし、今回の報知のように、職業的組合つぶしの労務屋を社長（兼労務重役）にすえる「タレント方式」を用い、それも系列スポーツ紙で強行実施させたのはどう見ても異例であり、異常な試みであることを見逃がせない。さらに、ともあろうに前科つきのスト破り専門「会社」と呼ばれる右翼集団を公然と導入して常駐させ、

ロックアウト後も明るい写真部の家族交流

その暴力的威圧の下で新聞製作を行なうにいたっては、絶対に許しがたい。

このように、〝報知のたたかい〟は全国の新聞労働者にとっては、経営者が反労働者的政策を貫くためには、どんな狂暴な手段をとってもよいのかどうか、を問われている闘争であり、このような試みが反動的な突破口となり横行、波及する時代を招来してよいのかどうか、を問われているのである。そして新聞・マスコミ界でその民主主義的あり方の重要な支柱の一つである労働組合が、この事態を容認できないことはもちろん、〝新聞人〟として経営陣の態度そのものも問われているのである。

「負けてはいけません」――そうだ負けられないのだ。

次はオレたちの番だ＝民放の仲間

報知系三単組のたたかいが「働きやすい職場

と民主主義を守るたたかい」になっている現在、同じ新聞産業に働く仲間たちもこのたたかいの勝敗に大きな期待をよせている。毎日新聞の輪転の仲間は「僕たちが、自分らの職場でたたかっていくのに、報知のたたかいが手本としてたくさんいかされていました。報知が岡本労政に敗けることになれば、今度は必ず僕たちの所におそいかかってくるでしょう。だから僕らは自分たちの問題として受けとめなければならない」と語る。

また、遠く離れた仙台に河北新報がある。その組合では、正式に〝報知支援対策委員会〟が設置され、定期的なガリニュースまで発行し、報知のたたかいがまったく河北労組のたたかいとなっているほどである。また、千代田地区労は、主婦と生活社争議いらいの大争議としてとらえ、大規模なカンパや全逓、全電通の旗もひるがえるデモを行なっている。さらに民放労連に結集する大阪の読売テレビ、東京の日本テレビなどは報知系と同じく親会社が読売新聞になっている。だからともいえるが、報知闘争は彼ら自身のたたかいとなっており、報知支援スト権もいち早く確立された。いずれも「報知の中で岡本労政が通用するようになれば一番早くおそいかかってくるのはオレたちのところだ」とみんなこうした危機感を持っている。しかも日本テレビではある部長などが「私は岡本社長を尊敬している。あの人はいい人だ」などといって、職場のしめつけを激しくしている。読売資本系列では、だれもが岡本社長の無法を許すことができないのであった。

前武さんにも〝マスコミ規制〟

報知の仲間がんばれ、私にできることならやろう——という声は各界に広がっている。カワウソのおじさんこと前田武彦氏もそうだ。「こ

んなひどいこと……いまは明治や大正と違う。いまは昭和四五年、時代は変わっているんだ。腹が立つねえ。ぼくにできることはラジオやテレビでその実状を訴えることだけどできるかぎりやる」といってくれた。

〝前武のおしゃべりをきこう――ラジオ関東五月一一日放送の『昨日のつづき』（午後一〇時四〇分）に〝ぼくらのことが出てくるぞ〟報知の組合ニュースは、当日は全員この番組をきこうとよびかけた。

ラジオ関東の『昨日のつづき』は、前田武彦がはかま満緒、富田恵子らとさまざまな話題をしゃべりあう一〇分間のトーク番組。世相チクリ、社会への警句、批判をマエタケ独特の毒舌やユーモラスな表現でつづる。

だが、その五月一一日、報知新聞の暴力団介入にふれておしゃべりするラジオ放談は、どこのラジオでも聞こえなかった。録音をすませたのち、〝局側の事情〟で中止になったのだ。局側は「係争中の問題は困る、一方的な表現はいけない」というのが理由だと説明しているが、報道プロと違い対談者の感想、意見をのべる娯楽番組にこういう規制がなされるのはうなずけない。他にいくらでも例がある。前田氏は「ほんとうのことをいっただけなのにネ。暴力的な経営者には腹がたつから、これからもどんどんしゃべるヨ」と残念そうだった。

週刊誌でも、争議当初から取材を始め、すでに終了した段階で記事の掲載をおさえられた週刊誌Pのような事実も暴露されている。

このような目に見えない圧力は、はかり知れないものだった。昨年（六九年）一七二日におよんだ春闘では、各週刊誌がこぞって報知の長期闘争をとりあげたが、右翼暴力団の導入、ロックアウトまでうけている今年の春闘は、絶好の素材でありながら新聞、週刊誌上には出ない。

報知の争議をとりあげたのは、『朝日ジャーナル』『サンデー毎日』の二誌ぐらいのものである。

国民の目と耳、そして口につながる新聞やマスコミの中で、〝自己規制〟ということが通用しているのはどういうものだろうか。〝自己〟というがほんとうの自分ではない。たとえ真に自分の判断であったとしても国民の目や耳をおおう権利まではないはずだ。〝規制〟というとなにか節度があるようだが、暴力や不法、アンフェアーな対象をとりあげることを避けることはむしろこれに組みすることであろう。相手がファッショ的論理でのぞんでくるときに、このような〝規制〟は屈服を意味するのではないか。同じマスコミに働く人間として、真剣に考えたい。

しかし、真実を消し去ることはだれにもできることではない。われわれの一人ひとりの口や耳、目をふさぎとめることはできない。報知のたたかう仲間は、きょうも、ビラで、ステッカーで、デモで、「報知のたたかい」を知らせ梅雨空の下を歩く。このパンフレットはあなたの手に、どうやって届きましたか。

俺たちは不屈の新聞労働者

このたたかいのパンフレットを新聞の仲間たちとともにつくっている五月二七日夜、就労闘争を行なった報知・報印の隊列に暴力団が襲いかかる事件が発生した。しつように、毎朝、毎晩〝仕事をさせろ！　職場へ帰せ〟と〝俺たちの玄関〟の前に立ちつづける労働者にいらだった右翼暴力団たちがなぐりかかり、足げにしてきたのだ。暴力団はねばり強い労働者のたたかいにあせり、エキサイトし、狂暴になりはじめている。報知・報印労働者の就労闘争を支援する労働者の輪が日を追って広がり、ある日は千

代田地区労を中心に一三〇〇名、ある夜は新聞労連の隊列一〇〇〇名と、報知労働者を支えるスクラムが大きくなっているのだ。この日の朝も神吉労連争対部長が暴力集団に力ずくでひきずりだされたばかりだった。報知労働者十数人が負傷し、一人はすぐに入院した。

無抵抗の労働者の中につっこんでくる狂暴な大男たち……だが体力で争うなら報知にも印刷にも空手有段者もいれば、柔道・レスリング、ボクシング、サッカー、ラグビーをはじめ、ひけをとらない強者たちがいるのだ。だが、労働者の力は団結だ、団結の輪を限りなく広げ、正義のスクラムで暴力団を職場から追いだすこと。印刷のY君はふり回したくなるコブシを握りしめて、ぐっとこらえた。窓からコッソリのぞいているのは、サンケイ以来の岡本の腹心庄司……

「チクショウ！　こいつらに涙をのんで、一〇〇〇人の労働者がバラバラにされ、無惨に組織を破壊されたサンケイの仲間たちよ。今、皆さんはどこにいるんだ！　会いたい、会って、みんながどんなにつらく寂しかったかを、夜を徹して語り明かしたい！」

元サンケイの文化部長・鈴木重雄氏は次のように語っている。「いま思うのは、なぜあの時首切り攻撃とたたかわなかったかという反省である。わたしがなぜ人間性無視の労務政策の矢面に立たされ〝負け犬〟のように社をやめてしまったのか、ということである」

サンケイで血塗られた手で、また、報知労働者に同じことをしようとしている、この〝死刑執行人〟をにらんでYはつぶやいていた。

「だが、俺たちはもう二度と同じ手はくわねえぞ！　サンケイの仲間たちよ、見ててくれ、仇をとるぞ！　俺たちの仲間はこんなに大きくなったんだ。新聞の仲間が、一人五〇〇円のカ

ンパを俺たちのために……アリガテエ……一〇〇〇人がずたずたにされたサンケィの仲間たち！　今、俺たちは三万数千の労連の仲間たちが五〇〇円のカンパを、そして連日のように一〇〇〇人の仲間が報知をとりまき、岡本と暴力団を包囲するところまで成長した！　文化人にしたってよ、物すごくいっぱい俺の好きな、将棋の升田元名人まで応援してくれてんだ。奴らはこのままひきさがらねえだろう！　俺たちは傷を負うだろう！　だが、どんなに傷ついても俺たちはもう死なねえ。東京中の仲間、日本中の心ある人が俺たちを激励してくれてるんだ。サンケィの仲間よ！　俺たちは、あんたたちの血のにじんだ尊いたたかいの歴史を決してムダにしない。仲間たちよ！　俺たちは不屈の新聞労働者だ！」Yはこのたたかいの中で身体でおぼえた、真実の弁舌を心で叫んでいた。

勝利までともにたたかう

〝第二のサンケイ化〟をねらった読売、岡本武雄氏が、報知に平和協定、合理化案を押しつけて、ついに右翼暴力団を入れたうえに、ロックアウトまで行なっていることは許せないことです。飯島勇という暴力団は、千代田区労協が組織をあげてたたかった〝主婦と生活社争議〟にも介入してきました。一〇年たった今日、報知新聞にやってきて暴力をほしいままにしているとは……。右翼暴力団を新聞経営者が使って、社会的に通るものかどうか。一時的には労働者を暴力で押えたかに見えるが、決してそうではありません。結果はかならず、私たちの団結の力によって、粉砕されるものなのです。

天下の読売新聞社が〝サンケイのアイヒマン〟といわれる岡本社長に命令し、暴力団を入れさせるようでは、よほど展望を欠いているとしか思えません。敵が暴力でくるなら、こちらは民主主義と団結で対決するつもりです。どんなことがあっても、国民が新聞に期待している使命――正義を愛する――を裏切ってはなりません。正義のため、明るい生活のために、新聞記者がこれだけがんばっていることに意を強くしています。特に朝日、毎日、読売の記者のみなさんに、この暴力団とロックアウトを糾弾してほしいと思います。そのためにも、この重要な時期に発行されたパンフレットは大きな意味を持ち、ぜひ多くの人たちに広めていただきたいと思います。報知争議共闘会議は、報知のみなさんとともに、勝利するまでたたかいつづけます。

報知争議共闘会議議長　太　田　清　治

日本労働組合総評議会　総評弁護団　千代田区労働組合協議会
マスコミ共闘会議　東京地方労働組合評議会　日本新聞労働組合連合

労働者・国民のみなさん

私たちは、すでにのべてきましたように、暴力団と全面ロックアウトによって職場と仕事を不当にうばわれています。

会社は〝企業は赤字〟とのべ、その原因が労働組合やアカによる〝人民管理〟のせいだと〝アカ攻撃〟を加えて、暴挙の責任を転嫁しようとしてきています。

しかし、岡本労政が行なっている〝赤字とアカ攻撃〟という二本のアカ攻撃が、どれほど根拠のない暴言であるか、そればかりでなく、どれほど私たち働く者をグロウしブジョクし、そのささいな願いや努力に真正面からいどみかかっているものかについてもすでに明らかにしてまいりました。

私たちは、私たちが、労働者として働きやすい職場づくりに精一杯とりくんできた事実をかけて、また、マスコミ産業に働く労働者として、こうした資本の身勝手や企業の私物化を決して許すことはできません。

また私たちは、資本の攻撃が単に身勝手に起こされたものとは考えません。そうではなくて、この攻撃には、労働者や国民が自由に、自主的にものを考えたり、いったりすることを押えつけ、考え方を支配するという性質が深く背後にひそんでいると考えます。

七〇年代にいわゆる情報・報道をにぎることを通して国民の考え方を支配するといわれていることとこの攻撃は無関係ではありません。私たちは、マスコミ産業に働く者として、この攻撃を許すことはできません。

私たちは、このように考えて、小冊子をたたかいの現場からの報告として作ってみました。

いま、私たちは不当な攻撃に対する強い怒りと私たちは正しいという確信で今までにみられない団結を固

めています。三単組の連帯も厳しいたたかいを通してすばらしいものに成長してきています。
また新聞労連に結集する仲間たちや関連産業、地区労の仲間たち、そればかりでなく多くの労働者・市民から絶大な支援をよせられています。
この熱い連帯と団結に支えられながら私たちは断固たたかいぬいていきたいと思います。そして、よりいっそう、一人でも多くの方々に私たちのたたかいをご理解いただき、ご支援をいただけますよう、この小冊子の御活用を強く訴えます。
この冊子は、作家の今崎暁巳氏をはじめ新聞労連の多くの仲間たち、労働旬報社の皆さんの協力によって生まれました。また東銀座印刷出版の労働者と報印の組合員の格段の努力で早期に本づくりが進められたこと、マンガも報知の仲間がつくるなど、小冊子自身が連帯のたたかいの中で生まれました。これらの皆さんに感謝と連帯の挨拶を送りたいと思います。

報知新聞労働組合　執行委員長　古川洋一
報知印刷労働組合　執行委員長　山口克巳
報知印刷大阪労働組合　執行委員長　糸井富雄

▽抗議先　東京都中央区銀座西三の一　読売新聞社長　務台光雄
東京都千代田区平河町二の二九　報知印刷社長　岡本武雄

▽激励先　東京都千代田区平河町二の二九　報知新聞労働組合　報知印刷労働組合
大阪市北区野崎町四六　報知新聞労働組合大阪支部　報知印刷大阪労働組合

編者・新聞労連報知系三単組

正式名——報知新聞労働組合
報知印刷労働組合
報知印刷大阪労働組合

良心の歴史をつくりたい

発行日　1970年6月10日　第一刷発行　**定価 120円**
1970年6月25日　第二刷発行

編　者　新聞労連報知系三単組
発行者　木　檜　哲　夫
発行所　労 働 旬 報 社
東京都港区芝西久保巴町32
電話　(434) 3 6 8 1(代)
振替 東 京　1 8 0 3 7 4
印刷所　東銀座印刷出版株式会社

労働旬報社／定価120円